ガイドのための
観光案内マニュアル

目次

貢

1. タイの歴史概要 3 – 28

2. タイ・日関係の歴史 29 – 32

3. タイの経済、社会、政治の全体像 33 – 38

4.タイの文化と観光 39 – 46

5. タイと近隣諸国とのつながり 47 – 50

6. タイ：エコツーリズムの終着点 51 – 55

7. 必ず訪れるべき土地 56 – 65

8. タイ観光の傾向 66 – 67

参考文献 68 – 70

タイの歴史概要

現在のタイ領土の先史時代

歴史上の時代区分について、歴史学者は、文献資料の有無で、先史時代を区分することが多いです。先史時代は、自然に頼り、石器を作っていた文化です。火を使い始め、土器、青銅、鉄の道具（利器）を作り始めました。洞窟や岩穴に住み、小さな集団で半定住生活を始めていました(Semi-nomad)。

タイの先史時代についての研究は、仏歴 2475 年（西暦 1932 年）頃に始まりました。スイスの考古学者フリッツ・ザラジン教授(Fritz Sarasin)が、タイの北部や中部の洞窟内を調査、発掘しました。調査、発掘により、小石で作られた、たくさんの礫器(Pepper Tool)や、土器の破片、動物の骨から作った道具（利器）が発見されました。そこで、考古学者は、発見されたこれらの道具（利器）を「サイアミアン文明」(Siamian Culture)と呼びました。その後、タイ歴史学の父であるダムロンラーチャーヌパープ王子により、先史時代に関するタイ初の教本となる「先史時代」が、仏歴 2480 年（西暦 1937 年）（チン・ユーディー教授, 2518）に、書かれました。

第二次世界大戦の最中、オランダの考古学者であるファン・ヘーケレン教授(Dr.H.R.Van Heekeren)は、泰緬鉄道（死の鉄道）建設のため旧日本軍により捕虜の一人として強制連行されました。路線は、ノーンプラードゥック駅からモッタマ湾近くのタンビュザヤまで 415 キロに及びます。

各国の捕虜と鉄道建設中、ファン・ヘーケレン教授は、石器のような石をたくさん発見し、保管しておきました。そして、第二次世界大戦の終戦後、ファン・ヘーケレン教授は、アメリカのハーバード大学で H.L.モビウス教授(Dr. H.L.Movious)と共に、それらの石を研究しました。偶然に発見した石器を「クウェーノーイ文明」または「フィンノイアン文明」(Fingnoian Culture) と名付けました。このクウェーノーイ川流域での石器発見は、新聞など紙面の記事となり、タイの先史時代研究への関心を引くこととなりました。

仏歴 2503 年から 2505 年（西暦 1960 年から 1962 年）にかけて、タイ・デンマークの調査団によりタイ先史時代の調査、発掘が行われました。こ

の調査で、数多くの遺物が発見されました。調査、発掘が行われた地域は、カーンチャナブリー県、ラーチャブリー県のメークローン川流域、クウェー川流域に渡りました。また、タイ国内のその他地域でも調査が行われ、広い範囲で遺物が発見されました。（パリチャー・カーンチャナーコム, 2521）

タイでは、10,000 年以上前の旧石器時代から定住していたことを示す道具（利器）が発見されています。先史時代の年代区分では、旧石器時代がかなり長いため、一部の専門家は、発見された遺物により実際の年代を研究する以前に、道具（利器）の発展、集団生活、住居によって先史時代を分けました。

旧石器時代　この年代は 700,000 年前から 10,000 年以上前とされていますが、はっきりとしていることは、この時代、人間はまだ定住せず遊動生活で、採集・狩猟をし、洞窟や小川に近い岩穴に住み、小石で作られた簡単な道具（利器）を作っていました。タイでは、多くの場所で旧石器時代の文明が発見されています。中でも重要なのがカーンチャナブリー県バーンカオ郡です。

中石器時代　旧石器時代からの進化が見られます。カーンチャナブリー県サイヨーク郡地域での発掘調査で、人骨の上に石の板を乗せた墓穴が見つかりました。頭蓋骨と胸の骨の上には赤い粉が付いていました。一方、メーホンソーン県のピー洞窟では、表面が滑らかに磨かれた、縄目文様の約 10,000 年前の土器が見つかりました。

新石器時代　専門家は、年代を 5,000 年前から 1,500 年前と定めています。先ほど申し上げた通り、新石器時代は、それ以前の時代から大きく発展しています。タイでは、高地や低地の多くの場所で住居跡が発掘されています。この時代に、洞窟や岩穴から川の流域へ移住したことが分かります。カーンチャナブリー県バーンカオ郡では、人骨、土器、磨製石器がたくさん発掘されました。発見された土器の中には、中国の龍山文化以前の文化に似た三脚の壺も有りました。そのため、約 3,800 年前、バーンカオ郡やカーンチャナブリー県内の周辺地域の人々と、中国中部との交流が有ったと言っても過言ではないかもしれません。人々の違いは磨製石器の様式の違いに見られます。一つは、長方形の「プン（鑿）」と呼ばれる斧状の磨製石器、もう一つは、同じく四角い斧または鑿ですが、「肩付き」のものが大陸北部で見つかりました。複数の発掘現場で 2 種類の磨

製石器が混在(こんざい)して発見されました。（ピセート・ジアジャンポン, 2532）これらのように、よく似た磨製石器、土器の存在は、新石器時代に、人々が大きな集団で生活し、交流を始めたことの証拠となるでしょう。

金属器時代は、道具、利器の形と道具、利器作りに用いる素材が石から金属へと大きく変わる、重要な進化がありました。この時代は、約1,500 年から 4,000 年前で青銅器時代と鉄器時代に分けれらます。「青銅」は、銅と錫(すず)の合金です。コンケーン県プーキアオ郡バーンナーディー村やバーンノーンノックター村、ウドンターニー県ノーンハーン郡バーンチエン村など、タイ国内の多くの場所で、青銅で作られた道具、利器や装飾品(そうしょくひん)が数多く発掘されました。

これらのことから、現在のタイ領土には、先史時代から多くの人々が居住していたと推測(すいそく)することができます。鉱物(こうぶつ)に富んだ土壌(どじょう)、水源、居住に適した環境による物質的な豊かさから、黄金の土地スワンナプームには、常に人々が居住してきました。先史時代の遊動(ゆうどう)生活をしていた小さな集団の社会から、文化、共同生活の規則、文明を持つ都市コミュニティへと進化し、それぞれの時代ごとに発達してきました。この東南アジアの土地は支配者を変えながら受け継がれ、やがて「民族国家」となり、現在のタイが誕生しました。

バーンチエン　イーサーン地方にある先史時代の遺跡がある地域で、世界遺産に登録されています。

バーンチエン遺跡は、ウドンターニー県ノーンハーン郡にある、先史時代の興味深い古代文明遺跡の一つです。また、タイの世界遺産の一つとして登録されています。

バーンチエン文明に関する話は、仏歴 2500 年（西暦 1957 年）頃にさかのぼります。バーンチエン村に住む村人が、家の柱を立てるため穴を掘ったところ、家を建設中(けんせつちゅう)の場所で、指紋(しもん)の様な文様(もんよう)のある土器や、表面に文様(もんよう)を付けた珍しい形の土器の破片がたくさん見つかりました。そこで、地面の表面を更に掘ってみたところ、村の周辺で、完全な状態の土器がいくつも見つかりました。これら土器の破片は集められ、村内の学校で、保存され、人々に公開されました。

その後、仏歴 2509 年（西暦 1966 年）頃、アメリカのハーバード大学の学生ステファン・ヤング(Stephen　Young)が、大学の奨学金を受け、バーンチエン区の村人の生活様式の研究に来ました。そして、彩 色 された土器の破片が、地面や村人が発掘した場所など広い範囲に散らばっていることに気付きました。そこで、ステファン・ヤングは、これら彩色土器の欠片について先史時代の考古学者であるチン・ユーディー教授に助 言 を求めました。また、アメリカのペンシルベニア大学で、熱ルミネッセンス法（炭素 14 法）で発見した土器の破片を年代測定したところ、これら遺物は約 5,600 年前の物で、先史時代の新石器時代の物であることが分かりました。

仏歴 2515 年（西暦 1972 年）初め、タイ芸術局は、バーンチエン区ワットポーシーナイ寺院周辺ならびにポット・モントリーピタック氏の住居周辺の発掘を行いました。また、名誉なことに、仏歴 2515 年（西暦 1972 年）3 月 2 日には、プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデート、ソムデットプラナーンジャオ・シリキット・プラボーロムラーチニーナートがワットポーシーナイ発掘現場をご視察され、後に、タイ初の野外博 物 館が設立され、現在に至ります。

バーンチエン文明は、埋 葬 の 特 徴 と、墓 穴 の中にある土器の文様と置き方により、次の 3 つの期間に区分されます。

1. 初期バーンチエン土器（約 5,600 年前から 3,500 年前）は、縄目または削った文様の黒い土器で、形は、大半が、口の開いた丸い壺でした。
2. 中期バーンチエン土器（約 3,500 年前から 2,300 年前）は、肌理の細かい、オフホワイト色の土器が発見されています。形状は、縦に長く、底が四角で、文様の無い物が多かったです。 焼 成 により生じた天 然 の釉 薬(flux)で表面に艶 が有るものも多く発見されました。
3. 後期バーンチエン土器（約 2,300 年前から 1,500 年前）は、最も多く土器が発見された年代で、その多くが渦巻き、または指紋の様な、特徴的な文様をしていました。

その独特な特徴からバーンチエン遺跡は、仏歴 2535 年（西暦 1992 年）、世界遺産に登録されました。アメリカのサンタフェで開催された第 16 回定例世界遺産委員会議において、バーンチエン遺跡は、世界遺産登録基準における第 3 項「(iii) 現 存するまたは 消 滅 した文化的伝統または文明の、唯 一のまたは少なくとも稀 な証拠(The world heritage information center)」を満たした世界遺産であるとみなされました。

歴史時代（または有史時代）

タイ領土内での王国の発達

歴史時代の開始時期は、国によりまちまちです。歴史時代開始の証拠は、中国の商人による記録文献でした。そこには、東南アジアの国、または船乗りたちの間では「黄金の土地スワンナプーム」と呼ばれていた国と中国やインドとの間の貿 易 について記 されていました。また、中国の商人の記録文献以外にも、インド南部で用いられていた文字であるパッラヴァ文字の碑文が発見されました。発見されたのは、プラーチーンブリー県のカオラン碑文とチャンタブリー県ムアンチャンタブリー郡の碑文で、仏歴

10 から１１世紀のものです。東南アジア地域が歴史時代に入ったことを示す一つの証拠です。

仏歴 20 世紀以前のタイの歴史の研究の多くは、中国の渡航記録文献に頼らなければなりませんでした。中国とは外交上でも貿易上でも長く交流があったことから、様々な文献が見つかり、貿易交流のあった東南アジアの国の様子が分かりました。それらから、東南アジアに都市国家の連合体があったことは、かなり明白です。また、生活様式や、宗教・統治・各種技術面においてインド文明からの影響を受けていた様子も分かりました。（ピセート・ジアジャンポン, 2532）

タイ領土の古代王国

仏歴 13 世紀から 17 世紀の国の発展

仏歴 12 世紀以降、「黄金の土地スワンナプーム」の名で知られる東南アジア地域で次の 2 つの重要な変化が起こりました。

1. ローマ帝国衰亡により、インドとローマの貿易が終了しました。また同じ頃、中国では王朝が唐王朝に変わり、中国が広く政治的権力を持ち、遠く離れた土地との交流に興味を持った時期でした。そのため、中国はローマ、インドに代わり、この地での貿易の役割を担うこととなりました。
2. 中央集権に変化が起こりました。黄金の土地スワンナプームでは、扶南国が群衆により占領されました。中国が文書の中に「真臘またはチャンラ」は、かつて扶南国の従属国であった小さな王国の群衆を独立させたと記されていました。

現在のタイの領土には、都市国家の連合体に発展した地域が多くありました。ドヴァーラヴァティー王国、ナコーンチャイシー王国、タンブラリンガ王国が挙げられます。仏歴 12 世紀頃に陸路でインドに向かい巡礼した中国の僧玄奘や、仏歴 13 世紀初頭に海路でインドに渡った中国の僧義浄の旅の記録に証拠が残っています。（ピセート・ジアジャンポ

ン, 2532）古代王国の国々は、次第に連合し始めました。地域の特徴と、商人から見聞きしたインド文化とを融合させて、独自の文化様式を確立していきました。

ドヴァーラヴァティー王国、シュリーヴィジャヤ王国は、イーサーン地方の大半の地域から現在のロッブリー県に位置するラヴォ王国にまで支配を広げていた、クメールや扶南国、チャンラを経由し信仰、宗教、芸術文化、統制において、インド文化の影響を受けました。

ドヴァーラヴァティー王国（仏歴 14 から 16 世紀）

中国の僧義浄の記録文献には、チャオプラヤー川流域に位置する「トウ・ロ・ポ・チ」王国について記されています。専門家は「ドヴァーラヴァティー」の名で知られる王国のことであると考えています。この時代の繁栄の中心であった場所は、様々な可能性が考えられています。ナコンパトムか、あるいはウートーンか、最近ではシーテープが中心地であったとの考えもあります。（ピリヤ・カイリック, 2560）多くの地域で「ドヴァーラヴァティーの王の高徳」を意味するサンスクリット語「スィータワーラワディーサワラプンヤ」と彫った銀貨が出土しています。都市を囲む堀の跡、数字の 8 に似た形の双子都市という特徴から、ドヴァーラヴァティー文化の都市がタイ領土内の広い範囲に存在していたことが分かります。主要運河流域では無く、ラーチャブリーのクーブア、スパンブリーのウートーン、カムペーンペットのトライトルン、ペッチャブーンのシーテープ、またはランプーンのハリプンチャイ王国に至るまでの北部の支流流域に分布していましたが、どれもが、数字の 8 の形をした双子都市でした。

ドヴァーラヴァティー文化の都市集団は、互いに商業取引をしていました。水上輸送で、遠く離れた地域とも取引をしていました。土着のモン・クメール族や南インドから渡ってきた商人など色々な民族が共に暮らしていました。これらは、仏歴 16 世紀末に勢力を広げたクメール王朝により文化同化される以前、仏歴 14 世紀から 16 世紀頃に栄えたドヴァーラヴァティー文化の原型、基盤でした。

シュリーヴィジャヤ王国（仏歴 13 世紀から 19 世紀）

現在のタイ中部河川流域およびタイ南部パーサック川、ムーン川流域でドヴァーラヴァティー文化の都市集団が栄えていた一方で、先史時代の集団も、同様に定住していた証拠が発見されています。5, 000 年から 6, 000 年

前、クラビ県アーオルック郡やパンガー県タクワトゥン郡などの洞窟や岩穴に定住していました。磨製石器、打製石器、土器や貝殻で作った装飾品が見つかっています。これらの集団は、2,500 年前まで定住しました。高地から海岸の平地に移動し、生活様式を農耕社会に進化させていきました。その後に続く、歴史時代への発展のスタートでした。

仏歴 8 世紀から 12 世紀の頃の南部の半島における海運取引の証拠が発見されています。ギリシャ、ローマ、アラブ、インド、中国など、外国の様々な文明の遺物が発見されました。これら地域は、外国との海運取引の港町として栄えました。この時期、社会は早いスピードで変化し、外国との取引により蓄積された知識により、地域または海運取引の場所は、国家として進化していきました。

シュリーヴィジャヤ王国は、旅で訪れた人物による記録、または仏歴 1394 年（西暦 851 年）にアラブの商人により記されたスライマーンの記録など、商人による記録が残っています。仏歴 1486 年（西暦 943 年）に記されたマスディ(Masudi) の記録にはサーバック諸島の裕福さについて「多くの人が暮らしている。軍隊の規模は大きい。船を速く走らせることができる。国王は様々な香料、香木を持っている。王の領土では、樟脳、伽羅、丁字（またはクローブ)、白檀、ジャコウ、カルダモン、ヒハツを作っている。」と書かれていました。そして、シュリーヴィジャヤ王国の街の様子がよく分かる重要な文献資料が、福建省泉州市の税関吏ジャオジュークアの記録であるジューファーンチーという本です。入港した商人を面接した内容をまとめ、仏歴 1768 年（西暦 1255 年）頃に記されたもので、支配領土の分割や沿岸の地方国について書かれていました。また、樟脳、沈香、堅木、丁字（またはクローブ)、白檀、シナモン、更には、真珠、乳香、ハーブ、象牙、珊瑚、猫目石（またはキャッツアイ)、琥珀、綿、刀など、商売や交換のために持ち込まれた土地の産物についても書かれていました。海外の商人たちは、この国に集まり、金、銀、磁器、レース生地、絹織物、絹糸、砂糖、レックサムチューという酒の一種、米、乾燥香料、ハーブ、樟脳などを用いて商品を交換していました。（ラクサナ・ブンルアン,2554）シュリーヴィジャヤ王国が繁栄していたことが分かります。

シュリーヴィジャヤ王国は、仏歴 18 世紀初頭以降、衰退し始めました。宋王朝後期の中国がジャンク船商売を、仲介者を通すものから、他の国家との直接取引に方針変更したため、シュリーヴィジャヤ王国が支配していたマラッカ海峡を通過する貿易における権力が弱まったことと、中央集権化が難しい島々が独立国家となったことが原因です。かつては栄え、裕福であったシュリーヴィジャヤ王国は、南インドのタミル軍の侵略を受け、陥落しました。

古代クメール王国と黄金の土地スワンナプーム内の地域への影響

新石器時代末期の航行技術の発達により、黄金の土地スワンナプームが貿易ルートとなりました。ローマの銀貨、ペルシャのビーズ、シュリー（ナーラーヤナの妻ラクシュミーの別名）の左右に 2 頭の象が刻印された陶器のメダルが発見されたことからも分かるように、多くの港町が有名になりました。陶器のメダルは、2 頭の象が鼻を持ち上げ、中央に座るシュリーに水を注いでいるものです。歴史学者や考古学者からは、「ガジャ・ラクシュミー・メダル」と呼ばれ、持ち主に豊かさをもたらすと信じられています。数多く発見されており、船による貿易で繁栄していたことが分かります。

扶南国は、カンボジアの南側の海岸にある港町「オケオ」から発達した国家でした。現在のシアヌークビルの近くです。扶南国は、取引のために船で訪れた商人たちから、直接、インドの影響を受けました。土着の人々は、習慣、文化、信仰などを伝承され、安定した社会となり、やがてメコン川南部の流域を支配する国家となりました。国家が広がり、信仰、宗教が広がり、国の繁栄も全地域に広がりました。しかし、指導者が弱いと歯向かわれることとなりました。

西暦 6 世紀頃、扶南国に対し、自らを「真臘」または「チャンラ」と呼ぶ国家集団が決起しました。真臘の王都は、ラオス人民民主共和国の南部シュレシュタプーラでした。専門家はチャンパーサック県ワット・プー周辺であったと考えています。真臘のマヘンドラバルマン王は扶南国を占領した後、かつて扶南国の従属国であった国々やその他の周辺国を統一し、扶南国を通じ影響を受けた南インド文明を基盤として、国家を繁栄させました。伝承された重要な思想が「デーヴァラージャ思想（神王思

想)」でした。カンボジアで影響力を持ち、後に、西へ広がり、南イーサーンのムン川沖積平野周辺から、ラヴォ王国を中心とするチャオプラヤー川沖積平野にまで達しました。

真臘は、西暦 6 世紀から 8 世紀に栄え、ラオス人民民主共和国南部から、豊饒な土地であったトンレサップ全域また、現在のカンボジア南部のオケオ海岸地域までの広大な領土を支配しました。王国の領土は広大でも、支配者である王の権力が弱まると、当時、栄え始めていたシュリーヴィジャヤ王国の連合国の一つであるジャワのチャム族が反乱を起こし、真臘に代わり、この領土を支配しました。また、ジャヤーヴァルマン皇太子をジャワに招きました。

ジャヤーヴァルマン皇太子はジャワから帰国後、デーヴァラージャ思想すなわち王は神と一体の存在とする、またはデーヴァ・ラージャ(Deva - Raja) を最高の王とする思想を採り、王国を復興するため、インドラプラ（都）を築きました。デーヴァラージャ思想またはデーヴァラージャ制度は、シヴァ派やヴィシュヌ派とは異なります。以前、王は、神を信仰するただの人でしかありませんでした。しかし、デーヴァラージャ思想は、王を神と一体の存在、王を神の化身と考えたのです。王位を継承すると、次の 3 つのことをしました。

- 1つ目は、「バライ」と呼ばれる池を掘ります。大きな水域で、一般用水のためのものです。
- 2つ目は王の名を冠した宗教建築とするため、または祖先に捧げるために、平地に礼拝所を建てます。
- 3つ目は、領土や王国を神に代わり支配する権威を、崇拝する最高神から得るために国王が参拝する場所とするため、高地、山頂または高い土台の上に宗教建築を建てます。

一方、クメールの城の特徴は、「シカラ」と呼ばれるインド北部の宗教建築と、「ビマーナ」と呼ばれるインド南部の宗教建築の様式を発展させたものでした。これら以外にも、真臘がジャワ王国の支配下にあった頃に「チャンディ」と呼ばれるジャワ芸術の宗教建築の影響を受けました。

ジャヤーヴァルマン 2 世は、チャム族に侵略された地方国を、再度統一し、プノン・クレン丘陵にデーヴァラージャ信仰を樹立しました。そして、新たに統一した国家を「古代クメール王朝カンポート」または

「カンプットメーラー」と呼びました。その後、西暦 12 世紀まで、王の治世の交代ごとに王都が移されました。この頃、古代クメール王朝は最も繁栄し、クメール建築の最高傑作であるアンコールワットが建立されましたが、仏歴 1720 年（西暦 1177 年）に、チャム族の侵攻を受けて陥落します。

その 4 年後、ジャヤーヴァルマン 7 世は、アンコールを侵略したチャム族を鎮圧し、アンコールを復興しました。アンコールと一部重複した場所に新しい王都を築き、「アンコールトム」と名付けました。信仰をデーヴァラージャから、仏法で国を統治する転輪聖王を志し、地方を結ぶ道路を整備しました。有名な道路は王道で、商売での移動のため、5 本の主要な王道があったことを示す証拠が残っています。（スラット, 2548）ジャヤーヴァルマン 7 世の代わりとしてムチャリンダ竜王に守られる仏陀の像を建立しましました。プリヤ・カーンの碑文に「プラチャイ・プッタ・マハーナート」と名が記されています。そして、重要な地方国に送られました。その多くは、コラート台地や中部の流域圏に安置されています。古代クメール王国からクメールの影響を吸収した証拠は、コラート台地のピマーイ石城、パノムルン石城、カーンチャナブリー県のムアンシン石城、ロッブリー県のプラーン・サーム・ヨートやペッチャブリー県のワット・カムペーン・レーンなどの建築様式から見て取ることができます。

仏歴 1732 年（西暦 1189 年）のジャヤーヴァルマン 7 世の死後、王位争いが起こり、王が何度も代わりました。古代クメール王国の衰退が始まり、古代クメール王国の支配下にあった多くの国が、独立国家となっていきました。西暦 12 世紀末期、チャオプラヤー川上流域では、ラート国領主ポークン・パームアンが、古代クメール王国から、妃として王の娘シカラテーウィー姫を迎え、吉祥なる勝利の剣を意味する短剣プラカンチャイシー、「シーインタラボディンタラーティット」の名を贈られました。チャオプラヤー川上流域の地方国を治めるため、ポークン・パームアンは、ポークン・バーンクラーンハーオと共に、クメール人の勢力を追い出しました。森林由来の製品の交易ルートを統治するために独立国家を築き

ました。以降、古代クメール王国に従属することはありませんでした。古代クメール王国の衰退が進み、西暦 16 世紀頃、ついにアユタヤーの支配下に落ちました。

スコータイ王朝時代（仏歴 1792 年から 2006 年）

初期スコータイ王朝の歴史に関する話は、第 2 碑文に記されています。プラマハーテーラシーサッタージュラーマニーが、宗教上の重要な様々な場所をセイロンに至るまで参拝したことについてです。プラマハーテーラシーサッタージュラーマニーは、ソーンクウェーすなわち現在のピサヌローク県で生まれ、プラヤーカムヘーンプララームの子であり、ポークン・シーナーワナムトゥムの孫であると記されていました。石碑には、スコータイ王国に関する重要な内容が記されていました。ポークン・シーナーオナムトゥムが治めた国で、ポークン・シーナーワナムトゥムの死後、スコータイ王国はクメール人の勢力の手中に落ちます。ポークン・シーナーワナムトゥムの子の一人でラート国領主ポークン・パームアンは、友人であるポークン・バーンクラーンハーオを誘い、挙兵しました。シーサッチャナーライとスコータイを奪い返し、二人のポークンは勝利しました。ポークン・パームアンは、自らが王となりスコータイを治めることはせず、代わりにポークン・バーンクラーンハーオを王位につけ、更に「シーインタラボディンタラーティット王」の称号を献げました。碑文には、ポークン・パームアンに対し与えられた「ピーファー・ジャオムアン・シーソータラプラ」をポークン・バーンクラーンハーオに譲ったと記されています。（ウィライラット, 2541）

偉業を残し、スコータイ王朝時代に大きく寄与したのが、ポークン・ラームカムヘーンで、偉大な大王でした。その知恵と能力で政策を遂行し、スコータイ王朝の領地を大きくしました。キャラバン形式の商売は繁栄しました。第 1 碑文には、「王は道行く人民から税金を徴収しない。人々は牛を曳き、馬に乗って商いをする。象を売りたい者は象を売り、馬を売りたい者は馬を売り、銀や金を売りたい者は金銀を売る。」とあります。人民は自由に交易を行っていたことが分かる興味深い文章です。また、スコータイ王朝は地域規模でキャラバン形式の商取引を行い、王国や関係する地域が早いスピードで発展していったことが、よく分かります。市場で求められていた製品は、森林由来の製品でした。そのため、プラナコン、ピマーイ、シーテープ、スコータイなどを結ぶ何本もの王道や、スコータイからモッタマ側の海岸を結ぶ道路、スコータイから現在のナコン

サワンであるプラバーン国を経由し、現在のロッブリーケンであるスワンナプーム国ラヴォやアユタヤーを結ぶ道路などの交易ルートが繋がっていきました。

また、スコータイは地域を代表するサンカローク焼き（宋胡禄）の産地でした。ポークン・ラームカムヘーン時代に、中国へ献上品を捧げ親睦を深め、また中国からサンカローク焼き（宋胡禄）の技術の一部が伝えられた証拠が残っています。多くの専門家は、「サンカローク（宋胡禄)」は「宋朝式の窯」を意味する「ソンコーロック」が語源であると考えています。この焼き物の釉薬は、薄い緑で、宋朝の時代によく使われていました。西暦 9 世紀から 12 世紀頃、この緑色の釉薬は「セラドン(Celadon) 」と呼ばれ、ヨーロッパでとても人気がありました。スコータイのサンカローク焼き（宋胡禄）は、2 度焼きの手法がとられることが多かったです。1 度目は、トゥリアン窯など、縦向きの陶器から熱を逃がす窯で「素焼き」します。アーチ状の窯で、数多く出土しています。その後、陶器に釉薬をかけ、再度、焼きます。横向きに熱を逃がす窯で、より高温になります。これらの窯は、胃袋の様な形のトゥリアン窯で、一般的に見られますが、2 度焼きの手法は、この時代に非常に進歩した手法でした。

中国国内の不安定な状態により、スコータイ王朝は、中国に代わり、サンカローク（宋胡禄）製品の輸出から利益を得ました。サンカローク（宋胡禄）産業は躍進的に発達し、スコータイ王朝に富を築きましたが、侵略を招き、やがて衰退しました。

アユタヤー王朝（仏歴 1893 年から 2310 年）

ラームカムヘーン大王の死後、かつて連合体であった各地で離反が相次ぎ、スコータイの森林由来の製品の交易ルート支配は衰え始めました。チャオプラヤー川流域に住む人々は、水上交易、北部との貿易で勢力を付け始めました。そこで、王都ヤショーダラプラの王ジャヤーヴァルマン 7 世からムチャリンダ竜王に守られる仏陀の像プラチャイ・プッタ・マハーナートを授けられた国々であるラヴォタイプラとスパンナプームまたはスパンナプラの地域の王国が共同して王朝を開きました。国々をまとめ、王朝を創設した者の名は、ウートーン王でした。

ウートーン王はスワンナプームのプラヤー・チョーディックラーチャセーティーの子です。亡くなったスパンナプーム王の娘と結婚し、現在のロッブリーであるラヴォ王国の姫とも結婚したため、ウートーン王は、しっかりとした政治基盤を築きました。アユタヤーの王に即位した頃、都を移

し、人々を移住させました。以前は水が流れていたチョラケーサームパン川が浅くなり、疫病が流行したことが、スパンナプームのウートーン王が国を捨て、人々を移住させ、疫病から逃げ、ノーンソーンに新しい国を築いた理由です。ここは、重要な王都となり、交易の中心地として目覚ましく繁栄しました。米、森林由来の製品、各種香辛料の取引の中心地として、チャオプラヤー川流域の往来を統治し、商人たちや、立ち寄った旅人たちの間で「クルンテープ・ドヴァーラヴァティー・シーアユタヤー」の名で知られました。

アユタヤー王朝は 417 年間続き、5 つの王家 33 代の王が治めました。タイ人の団結と文化遺産を築いた時代でした。歴史学者はアユタヤー王朝を次の 3 つの時代に分けています。

1 つ目の時代は、基盤を置き、安定を築いた時代でした。（仏歴 1893 年から 1901 年）ウートーン王・ラーマーティボーディー1 世からラーマーティボーディー2 世（サームプラヤー王）の代で、王朝の初期で領土も小さい頃でした。安定を築くために国を運営しました。当初はクメールと同盟関係にありましたが、アユタヤーは兵を起こし、クメールを攻撃しました。中国とのみ交易しました。

2 つ目の時代は、政治権力を持ち、経済的に繁栄した時代でした。仏歴 1991 年から 2231 年（西暦 1448 年から 1688 年）ボーロマトライローカナート王からナーラーイ王の代で、アユタヤーの支配体制が、より確固なものとなりました。外国と広く交易しました。アユタヤーは、豊かな港町となり、アジアやヨーロッパのどの国の貿易船の船乗りからも知られるようになりました。タイは第一次アユタヤー陥落をされましたが、わずかな期間で独立を回復することができました。

最後の時代は、権力衰退の時代です。仏歴 2231 から 2310 年（西暦 1688 から 1767 年）ペートラーチャー王（別名マハーブルット王）からエーカタット王の代で、アユタヤーは軍事的、政治的に弱まりました。国内で反乱が起き、権力争いが何度も起こりました。ビルマ軍に 23 カ月間、包囲され、アユタヤーは、食料、水、砲弾不足に陥り、アユタヤーは士気を失い、陥落、破壊されました。その後、華僑の軍人タークシン王が、わずか 7 カ月間で、シャム王国またはタイの統治権を奪い返しました。

アユタヤーは周囲を、チャオプラヤー、ロッブリー、パーサックの 3 本の川で囲まれた中州です。アユタヤーの正式名称は、「クルンテープマハーナコン バウォーンタワーラワディー シーアユタヤー マハーディロックポップ　ノッパラットラーチャターニーブリーロム　ウドムニウェートサター

ン」です。創設時はナーラーヤナの化身であるラーマの都を意味する「アヨタヤー」と呼んでいました。そのため、バラモン教の思想に則り、ラーマは神王(GOD　KING)である王の名となりました。ビルマからの独立を宣言した仏歴 2127 年（西暦 1584 年)、ナレースワン大王は、都の厄払いをし、アヨタヤーを、「破ることのできない都」または「敗北したことの無い都」という意味の「アユタヤー」に改名しました。

アユタヤー初期の支配形態は、行政の中心は首都にあり、周囲の四方に前哨基地がありました。ウートーン王は、ジャトゥサドムと呼ばれる 4 つの行政組織、すなわち内務省、宮内庁、大蔵省、農業省を整えました。地方国には、内地方国、外地方国そして従属地方国がありました。仏歴 1991 年から 2031 年（西暦 1448 年から 1488 年）のボーロマトライローカナート王の時代、行政改革が行われました。行政を、軍部総司令官サムハカラーホームが管掌する兵士と、首相サムハナーヨックが管掌する文民に分けました。全国の文民を統治する首相が王より付与された欽錫名は「チャオプラヤー・チャックリー」でした。

アユタヤー時代の経済は、農業と海外交易を基盤に栄えていました。国への歳入は関税で確保していました。利益の約一割を徴収していました。ジャンゴープと呼ばれ、陸路や水路の検問所で徴収していました。商売で訪れた外国人は、宮廷に直接問い合わせなければなりませんでした。アユタヤー時代、ワット・アルンラーチャワラーラーム近くのトンブリー周辺は、「バーンマコーク検問所」と呼ばれ、取引のために立ち入る前に内帑局への入港税を徴収する場所でした。また、錫など、労働の代わりに国庫に納める物品による歳入である年貢や、カールチャーと呼ばれる官庁への手数料の徴収もありました。

アユタヤーは、中国、日本、ペルシア更に、ヨーロッパの国、すなわちアユタヤーと最初に交易を始めた国ポルトガルと交易がありました。また、ポルトガルの神父はローマカトリック派キリスト教を布教しました。特に、ナーラーイ王の時代、チャオプラヤー・ウィッチャイェーンの妻で、ポルトガルと日本の混血のマリー・ギマルドは、ターオ・トーンキープマーの官位を与えられ、王室の菓子部長となりました。タイの菓子に初めて卵を取り入れ、トーン・イップ、トーン・ヨート、フォーイ・トーン、トーン・エークなどを作り始めました。

オランダ（ネザーランド）とは、商業的、政治的な関係がありました。そこで、植民地時代において、国の安定のバランスをとるため、アユタヤーはイギリス、フランスとも交易しました。フランスとの関係は、宗教面の関係から始まり、その後、商業的、政治的関係を築きました。フランスは、外交使節を派遣しました。シュバリエ・ド・ショーモンは使節団を率いて、仏歴 2228 年（西暦 1685 年）に、初めて首都シーアユタヤーを訪れました。タイは、プラ・ウィスートスントーン（俗称パーン）率いる外交使節をフランスに派遣し、ルイ 14 世に謁見しました。しかし、ナーラーイ王治世の末期から、ペートラーチャー王の治世の仏歴 2231 から 2246 年（西暦 1688 から 1703 年）まで、政治的理由で関係は途切れました。全ての外国との交易が停止したため、首都シーアユタヤーは経済危機に陥りました。

タークの国主プラヤー・ターク（シン）が独立を奪回し、多くの派閥に分裂していた王国を統一しました。また、シーアユタヤーは戦いで既に廃墟となっていたため、トンブリーに王朝を建てました。

トンブリー王朝

プラヤー・タークは、トンブリー王朝を統治するタークシン大王の戴冠式を行いました。在位した 15 年間、政治、統治、経済、社会の分野で、めまぐるしく発展し、シャム国を再び安定させ、ラタナコーシン王朝時代の 200～300 年以上もの繁栄を築きました。

宗教に関して、タークシン大王は寺院を修復、建立し、仏教を保護しました。また、土地を与え、中国僧坊近くのサンタクルーズ教会などの教会や、バーンルアン運河にスンナ派イスラム教徒のためのグティカーオモスク（バーンルアンモスク）を建てさせました。修行を推奨し、自身の王宮プララーチャワンドゥームと共にワットアルンを修復しました。

国家の復興に関して、トンブリーは、国が不安定だった頃の王都でした。海に近いトンブリーを選んだのは、敵が来て窮地に追い込まれても、逃げ道を確保できるからでした。トンブリーには、ナーラーイ大王の時代に建てたウィチャイイェン砦があります。後にウィチャイプラシット砦と改名しました。海に近い小さな町で、外国との貿易で使う港町に適していました。また、国を守るための銃器の調達が容易でした。まとめる

と、トンブリー王朝は、15 年という短命に終わりました。タークシン大王は、安定と独立の奪回のため、英知と能力の限りを尽くし、瞬く間に国家の安定を築きました。

仏歴 2325 年（西暦 1782 年)、プラヤー・サンは反乱を起こし、タークシン大王を捕らえ、ワット・アルンラーチャワラーラームの仏堂に幽閉しました。ソムデットチャオプラヤー・マハーカサットスック（幼名トーン・ドゥワン）が、クメール遠征から戻った際、全官吏の決定により、仏歴 2325 年（西暦 1782 年)、48 歳のタークシン大王を白檀の棒で処刑しました。しかし、タークシン大王はジャンク船でナコンシータマラートへ行き、プロムキーリー郡のカオクンパノム寺で出家し、実際に死亡したのは仏歴 2368 年（西暦 1825 年）であるとの歴史的逸話もあります。

初期ラタナコーシン王朝時代（仏歴 2325 年から 2394 年）

プラバートソムデット・プラプッタヨートファーチュラーローク・マハーラート（仏歴 2325 年から 2352 年）（ラーマ 1 世）

仏歴 2279 年（西暦 1736 年）3 月 20 日、父「トーンディー」と、トンブリー王朝時代に裕福であった中国人富豪の娘である母「ヨック」との間に生まれました。アユタヤー王朝のウトゥンポーン王に、小姓として仕官した後、ソムデットプラアマリンタラーバロムラーチニー（サムットソンクラーム県アムパワー郡の富豪の娘ナーク）と結婚しました。トンブリー王朝時代に官吏として仕官し、ルワンヨック・クラバット・ラーチャブリーの爵位をもっていました。また、チャオプラヤー・チャックリーの名を王より付与されました。ソムデットチャオプラヤー・マハーカサットスックは 27 年間、在位し、仏歴 2352 年（西暦 1809 年）9 月 7 日に亡くなりました。

王としての初の業績は、トンブリーから、チャオプラヤー川の東側のクルンテープに遷都したことです。戦略上、トンブリーよりも適していたからです。新たに王宮を建て、ワット・プラシーラッタナサーサダーラームを王宮の横に建てました。スコータイ時代、アユタヤー時代から継承された宝であるタイの文化を復興させました。また、勇気のある武将で、効率的に戦を指揮しました。特に、仏歴 2328 年（西暦 1785 年）の泰緬戦争では、三印法典と呼ばれる法律を新たに制定しました。

チャクリー王朝の初代の国王は、統治者であり、知恵と能力を持った武将でした。王国の領土を広げ、国民の幸福のため、様々な面で国家を保護しました。

プラバートソムデット・プラプッタルートラーナパーライ（仏歴 2352 年から 2367 年）（ラーマ 2 世）

幼名は「チム」と言いました。仏歴 2310 年（西暦 1767 年）2 月 24 日、サムットソンクラーム国アムパワー郡で、プラバートソムデットプラプッタヨートファーチュラーローク大王とソムデットプラアマリンタラーバロムラーチニーの息子として生まれました。父が、ラーチャブリーのルワンヨック・クラバットとして仕官していた頃でした。父がチャクリー王朝の初代国王に即位すると、クロムルワンイッサラスントーン王子の名を得ました。仏歴 2352 年（西暦 1809 年)、王に即位しまし、仏歴 2367 年（西暦 1824 年）7 月 21 日、56 歳で亡くなりました。

国家の安定における王の偉業は、王国に移住してきたモン族をパトゥムターニー、ノンタブリー、ナコーンクアンカン（プラプラデーン）に移住させたことです。また、タイ国民の安定のため、プライ制度を、わずか 1 カ月間の労役と 3 カ月間家族と過ごすのを順に繰り返すよう定め、プライと呼ばれる人民が家族と長く過ごせるようにしました。仏歴 2354 年（西暦 1811 年)、阿片の吸引と売買禁止を法律に定めました。仏歴 2359 年（西暦 1816 年)、タイ国旗を、赤地の上に白いチャクラ（仏教の輪）とその内側に白象を載せたものにしました。仏歴 2364 年（西暦 1821 年)、イギリスはタイにジョン・クローファードを芸術・文化の親善使節として派遣しました。第 2 代国王は、タイで一番の芸術家の国王でした。文学面での才能があり、7 話の脚本を書き、また、タイの料理やお菓子に関する詩や、船を鑑賞する詩を作詞しました。建築、彫刻の分野では、ワット・アルンラーチャワラーラームラーチャウォーラマハーウィハーンのストゥーパ（仏塔）の建立や、ワット・スタットテープワララームの仏堂の門に彫刻を施しました。胡弓の一種、ソーサームサーイの優れた演奏者で、ブランローイファーという観月にまつわるタイの曲の作者でもあります。第 2 代国王は、文学、芸術の天才で、この治世は、ラッタナコーシン王朝の文学の黄金時代でした。

プラバートソムデット・プラナングラオジャオユーフア（仏歴 2367 年から 2394 年）（ラーマ 3 世）

幼名は「タップ」と言いました。仏歴 2330 年（西暦 1787 年）3 月 31 日、トンブリー側の王宮プララーチャワンドゥームでプラバートソムデットプラプッタルートラーナパーライ王が、未だ、クロムルワンイッサラスントーン王子の名であった頃に、母親ソムデットプラシースラーライ（リアム皇太后）との間に長男として生まれました。仏歴 2356 年（西暦 1813 年）にクロムムン・チェーサダーボーディンという官名を得ました。そして、仏歴 2394 年（西暦 1851 年）4 月 2 日、63 歳で亡くなりました。

国家の安定における王の偉業は、ヴィエンチャン王国のアヌウォン王による、タイ領・イーサーン支配を防いだことです。タイ、ベトナムのクメールに関する争いを、一切、タイが不利になること無く、終わらせることに成功しました。また、アジアやヨーロッパの国々との交易を振興しました。官名がクロムムン・チェーサダーボーディンの頃から、中国とのジャンク船による貿易を振興し、莫大な利益を収めていました。この利益を赤い袋に入れて国庫に保管しました。このお金は「ムン・チェーサダーボーディンの赤袋の金」と呼ばれていました。（ラーマ 5 世の時代、フランスとの間に論争が起きた際、タイ国家にとって強みとなりました。）

ジャンク船による貿易が得意であったため、ラーマ 2 世はラーマ 3 世に「ジャオスア（大物）」と愛称を授けました。仏歴 2369 年（西暦 1826 年）、バーネイ条約を締結しました。その 6 年後、アメリカとの外交を開始、仏歴 2375 年（西暦 1832 年）に条約を締結し、タイは経済的な優位性を獲得しました。条約締結者はエドマンド・ロバーツでした。芸術の分野では、ワット・アルンラーチャワラーラームラーチャウォーラマハーウィハーンのストゥーパ（仏塔）の修復や、仏歴 2387 年（西暦 1844 年）には、ワットヤーンナーワーのジャンク船をかたどった基壇のあるパゴダを建立しました。タイの知恵に関して、国王は、王立協会の賢者に、重要な文学やタイ古式医学を、プラ・ウボーソットの東屋の石板と、ワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラーム・ラーチャウォーラマハーウィハーンのプラマハチェディ（大仏塔）の周囲に刻ませました。そのため、この寺院は、タイ初の医科大学となりました。現在、「ワットポーの碑文」は、ユネスコにより世界の記録(MEMORY OF THE WORLD:MOW)に登録されています。

ラタナコーシン王朝時代のタイの歴史　タイの改革、革命時代（仏歴 2394 年から 2475 年）

ラーマ 4 世の時代から、ラーマ 7 世の治世の仏歴 2475 年（西暦 1932 年）に民主主義への政変が起こるまでの期間、タイは西洋式の近代国家となるための改革、革命の時代でした。しかし、タイは、タイ国王の知恵と能力により、アジアで唯一、独立国であり続けた国でした。

プラバートソムデット・プラジョームグラオジャオユーフア（仏歴 2394 年から 2411 年）（ラーマ 4 世）

幼名はモンクット王子でした。仏歴 2347 年（西暦 1804 年）10 月 18 日、プラバートソムデットプラプッタルートラーナパーライ王とソムデットプラシースリエントラーバロムラーチニー（ジャオファーイン・ブンロート）との間に生まれました。同じ母を持つ弟、プラバートソムデットプラピンクラオジャオユーフア（ソムデットジャオファージュターマニー）がいました。満 20 歳になったとき、風習に従い 13 日間、出家しました。父王が亡くなり王位は、腹違いの兄プラバートソムデットプラナンガオジャオユーフアのものとなったため、モンクット王子は更に 27 年間、出家しました。

ラーマ 4 世は、タイが西洋の国の植民地にならないため、最も適した時期に治世しました。英語、ラテン語の知識がありました。外国の変化について学び、西洋人と友好的な関係を築きました。タイに対し、独占的貿易を廃止し、西洋との自由貿易をするよう求める西洋の権力拡大に関する世界情勢を理解したので、タイの独立性を維持するため、慎重に、また西洋との友好関係を築く方針を採りました。併せて、タイの近代化も進めたため、タイは、西洋の国の植民地となるのを逃れることができました。仏歴 2398 年（西暦 1855 年）、タイはイギリスとの間にボーリング条約を締結しました。更に、仏歴 2400 から 2401 年（西暦 1857 年から 1858 年）、ヴィクトリア女王に捧げる友好条約を締結しました。

仏歴 2403 年から 2404 年（西暦 1860 年から 1861 年）、フランスのナポレオン 3 世へ財政経済に関する使節を派遣しました。自由貿易を広めました。造幣局を建て、様々な硬貨を製造しました。また、国家の歳入を増やすため、税金に関する改定を行いました。ラーマ 4 世による国家の改革には、西洋の知識を用いました。軍事面、教育面での相談役としてや、外国人とのコミュニケーションが可能になるよう妻子への英語教育のため、西洋人を各省庁に採用しました。王国政府公報や官報を印刷するために、王宮内に「ローンアクソンピムガーン」という名の印刷所を建てました。ジャルンクルン通り、バムルンムアン通り、フアンナコン通りの建設、また、仏歴 2404 年（西暦 1861 年）には、河川から国全土を繋ぐ、チェディ

ブーチャー、マハーサワット、パースィージャルーン、ダムヌンサドゥアックなどの運河を建設しました。社会面、文化面では、謁見の際、貴族に服を着させました。仏歴 2399 年（西暦 1856 年）、航路と陸路を進んだ際、国民に謁見を許可しました。宗教の面では、戒律を厳格に守るタマユットニカーイ派を創設しました。年代記を訂正、新たに作成させました。王自身が手書きで訂正した詔勅版の年代記です。プラパトムチェーディー、ワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラーム、チェディプーカオトーンを改修しました。知識、学問の面では、英語に秀でていたため、化学、地理、歴史、天文学など、様々な分野の書物を読みました。その結果、日食が起こる時間を正確に計算することができました。仏歴 2411 年（西暦 1868 年）8 月 18 日に、プラチュワップキーリーカン県ワーコーで日食を観測しました。しかし、ラーマ 4 世はマラリアに感染したため、バンコクに戻った後、体調を崩し、仏歴 2411 年（西暦 1868 年）10 月 1 日、21：00 に亡くなりました。在位期間は、たった 7 年でした。

プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフア（仏歴 2411 年から 2453 年）（ラーマ 5 世）

幼名は、チュラーロンコーン王子でした。プラバートソムデットプラジョームグラオジャオユーフア王の長男として、プラナーントゥープラオンジャオ・ラムプーイパマラーピロム（後の、ソムデットプラテープシリンタラーバロムラーチニー）との間に生まれました。仏歴 2416 年（西暦 1873 年）9 月 20 日、成人し大王の権限を完全な形で得ました。

国の改革の面では、国政協議会と枢密院を設置しました。仏歴 2417 年（西暦 1874 年）、中央統治改革をしました。国家の行政を 12 の局にわけ、管理監督者として局長を置きました。また、10 の省の設立を発表し、現在まで続いています。地方行政の改革は、バンコクを中心とした中央集権国家を作り上げました。地方行政制度であるテーサーピバーン制を導入し、内務省の統括下に置きました。法律、裁判制度の改革は、仏歴 2434 年（西暦 1891 年）に法務省を設置し、法律に関する顧問や、刑法検査委員会、奴隷解放法を設け、また、タイの法廷弁護士を輩出するため、仏歴 2440 年（西暦 1897 年）に、法律学校を設置しました。これらにより、タイは司法に関する権利を完全な形で手にすることができました。タイの直接的な社会改革は「奴隷解放」です。タイの社会から奴隷を無くすために、30 年掛けて徐々に進めてきました。また、プライと呼ばれる人民制度も廃止しました。なぜなら、プライ制度は、自由交易の中での経済拡大の障害となっていたからです。教育面の改革では、国民のための初の学校となる、ワット・マハンナパーラーム学校を仏歴 2427 年（西暦 1884 年）に設

立しました。仏歴 2430 年（西暦 1887 年）に、教育省を設置し、公務員の訓練所（後に、チュラロンコーン大学）である、警察士官学校、海軍士官学校、測量学校を置きました。

国家の独立性の保持について、ラーマ 5 世の時代、イギリスとフランスがタイに勢力を広げようとしていました。そこで、パクナムにプラジュンラジョームグラオ砦を建て、大砲で備えました。フランスは、仏歴 2466 年（西暦 1923 年またはラッタナコーシン暦 112 年）2隻の戦艦でサムットプラカーンのパクナムに入り、タイ側と戦闘が起こりました。フランス戦艦は突破し、チャオプラヤー川沿岸のフランス大使館に突入しました。事態を早急に終結させるために、タイはフランスの要求に応じました。タイは 200 万バーツ近い金額を「ムン・チェーサダーボーディン（ラーマ 3 世）の赤袋の金」で支払いましたが、フランスは、戦艦を進め、チャンタブリー、トラート、シェムリアップ、バタンバンとメコンの全ての川中島を占領しました。タイは、植民地化から免れるために、仏歴 2451 年（西暦 1908 年）、イギリスに南部の領地クランタン、トレンガヌ、サイブリ、プルリスを譲りました。

ラッタナコーシン暦 112 年の危機の後、ラーマ 5 世と家臣は、外交、軍事と、ヨーロッパの他の大国に援助を求めることによる問題解決に努めました。仏歴 2440（西暦 1897 年）と仏歴 2450 年（西暦 1907 年）に、ラーマ 5 世は、ヨーロッパを訪れました。その間に、外交関係を強めるために行った重要な任務は、フランス大統領、ドイツ皇帝、イギリスのヴィクトリア女王、オーストリア＝ハンガリー帝国や、ベルギー、イタリア、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなど、その他ヨーロッパの国々の王の訪問でした。

プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフアは、仏歴 2453 年（西暦 1910 年）10 月 23 日に亡くなりました。在位期間は 42 年でした。「ピヤマハーラート（歓喜大王）」と献名され、現在もタイ国民の敬愛を受けています。

プラバートソムデット・プラモンクットグラオジャオユーフア（仏歴 2453 年から 2468 年）（ラーマ 6 世）

幼名は、マハーワチラーウット王子でした。プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフア王の息子として、ソムデットプラナーンジャオサオワパーポーンシー妃殿下との間に、仏歴 2423 年（西暦 1880 年）1 月 1 日に生まれました。仏歴 2436 年（西暦 1893 年）、イギリスに留学しました。仏歴 2437 年（西暦 1894 年）、プラバートソムデット・

プラジュンラジョームグラオジャオユーフア王は、ソムデットジャオファーマハーワチラーウット　クロムクンテープタワーラワディー王子に皇太子としての位、ソムデットプラボーロマオーラサーティラート　サヤームモンクットラーチャグマーンを付与しました。仏歴 2453 年（西暦 1910 年）10 月 23 日、王位につきました。仏歴 2468 年（西暦 1925 年）11 月 25 日に亡くなりました。王の偉業は、国家、宗教、王への忠誠心、タイ人の団結を強調することによる国民の国家主義の構築でした。また、仏歴 2461 年（西暦 1918 年）に、トン・トライロングと呼ばれる、現在の三色旗を採用しました。赤、白、青は、それぞれ国家、宗教、王を示しています。タイの国際化を推し進めました。仏歴 2456 年（西暦 1913 年）に、姓氏法を制定し国民に姓を持たせました。第一次世界大戦が勃発すると、連合国側での参戦を表明し、民兵を送りました。このことで、タイは国際的に知られるようになりました。芸術、文学の面では、ノンフィクション、脚本、物語を書き、思慮深い王を意味する「プラマハーティーララートジャオ」と呼ばれました。2464 年（西暦 1921 年）、就学義務年齢の全てのタイ人は 4 年間、小学校に入らなければならないと、小学校令を定めました。タイ初の大学となるチュラーロンコーン大学を設立しました。また、民主的な政治運営を実験するため、ミニチュア市街「ドゥシットターニー」作りました。

プラバートソムデット・プラポッククラオ・ジャオユーフア（仏歴 2468 年から 2477 年）（ラーマ 7 世）

プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフア王の最後の息子として、ソムデットプラシーパッチャリンタラーバロマラーチニーナート妃殿下との間に、仏歴 2436 年（西暦 1893 年）11 月 8 日に生まれました。幼名は、ソムデットジャオファー・プラチャーティポックサックディデートでした。仏歴 2468 年（西暦 1925 年）2 月 25 日に戴冠式を行いました。タイにおける最後の絶対君主であり、最初の立憲君主でした。テーサバーンの形での地方自治の方針を定めました。枢密院の改善を行い、憲法草案を作成させました。仏歴 2475 年（西暦 1932 年）、人民党により政変が起こりました。その後、仏歴 2476 年（西暦 1933 年）、政府はラーマ 7 世が起草した法典と同じ内容のテーサバーン法、また、憲法を発布しました。仏歴 2477 年（西暦 1934 年）3 月 2 日、自らの意志で退位しました。仏歴 2484 年（西暦 1941 年）5 月 30 日、イギリスで亡くなりました。

民主時代のタイの歴史（仏歴 2477 年から現在）

プラバートソムデットプラジャオユーフアアーナンタマヒドン（仏歴 2477 年から 2489 年）（ラーマ 8 世）

ソムデットジャオファーマヒドンアドゥンラデートクロムルアンソンクラーナカリン（ソムデットプラマヒタラーティベートアドゥンラヤデートウィゴーン＝プラボーロムラーチャチャノック）の長男として、モム・サンワーンマヒドン・ナ・アユタヤー（ソムデットプラシーナカリン＝プラボーロマラーチャチョンナニー）との間に、仏歴 2468 年（西暦 1925 年）9 月 20 日に、ドイツのハイデルベルクで生まれました。プラジャオウォラウォントゥー・プラオンジャオアーナンタマヒドンは、仏歴 2477 年（西暦 1934 年）、スイス留学中の 9 歳で王位についたため、摂政（せっしょう）が必要でした。ラーマ 8 世は、仏歴 2481 年（西暦 1938 年）に初めて、2 回目は仏歴 2488 年（西暦 1945 年）にタイに帰り、連合軍（れんごうぐん）の分列行進（ぶんれつこうしん）を閲兵（えっぺい）し、タイ王国憲法に署名しました。仏歴 2489 年（西暦 1946 年）6 月 9 日に亡くなりました。

プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデート（仏歴 2489 年から 2559 年）（ラーマ 9 世）

プラバートソムデットプラジャオユーフアアーナンタマヒドンの弟です。仏歴 2470 年（西暦 1972 年）12 月 5 日に生まれました。幼名は、プラウォラウォントゥー・プラオンジャオプーミポンアドウンヤデートでした。仏歴 2489 年（西暦 1946 年）6 月 9 日、若干 18 歳 6 か月 4 日で、ラーマ 8 世より王位を継承し、仏歴 2493 年（西暦 1950 年）5 月 5 日、戴冠式を行いました。その式の中で「シャム国民の公益（こうえき）と幸福のため、公正（こうせい）に国を治める」と初の勅命（ちょくめい）を下しました。プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートは、最も長く在位したタイ国王でした。国王は、国民の本当の幸せのために、献身しました。教育の面では、公式、非公式そのどちらもの初等教育から高等教育までの整備や、得た知識で国家を発展させるために、海外留学の奨学金の整備を推進しました。芸術・文化の面では、王室守護（しゅご）寺院へ奉納（ほうのう）するための王室の田植えの儀式である農耕祭（のうこうさい）の復活など、あらゆる芸術文化を保護しました。宗教の面では、十徳（じっとく）を厳格（げんかく）に守り、出家しました。また、タイ国内の様々な宗教の信仰を擁護（ようご）しました。国民の生活の向上のために、王の考えから生まれたプロジェクトは 4,000 を超えます。父親が子を思う様に、国民のことを思い、タイ国民の幸せのため、と言う目的のもと、タイ全土の全ての地域の様々な分野の発展を網羅しています。

現在、4,000 プロジェクトを超える王室プロジェクトがあり、次の様に分類されます。

1. 農業プロジェクト　各地に適した動植物の実験、研究のプロジェクトです。研究所で行われ、成果は、国民に伝承されます。稲作、土壌改善、棚田、新しい農業原理など、新しい農業の専門知識を与える農家への教育が行われています。

2. 環境プロジェクト　自然環境保護、改善方法に関するプロジェクトです。土壌改善、汚水処理、ベチバーを利用した土壌流失・乾燥防止プロジェクトや、新しい農業原理である、狭い土地で栽培するため、土地を 4 つに区分し、30% の土地は農業用水と魚を育てるため貯水池とし、30%は畑とし、30%は田んぼとし、10%を居住地と家庭菜園とすることで、年中、食べ物を確保できる混合農業方法、また、シンプルで自然な方法による森林の復活などです。

3. 公衆衛生に関するプロジェクト　僻地に住む貧しい国民の健康問題を解決するため、仏歴 2510 年（西暦 1967 年）からの医療団プロジェクトは、タイ全土に広がっています。村の医者の教育プロジェクトもあります。

4. 職業訓練プロジェクト　収入を確保し自立するためのプロジェクト、農業技術を指導するプロジェクト、全国の芸術職プロジェクト、パーム油の小規模産業促進プロジェクト、花・果樹繁殖プロジェクトがあります。

5. 水源の開発に関するプロジェクト　農業や生活用水のための、人工降雨プロジェクト、貯水プロジェクト、水門・水門堰プロジェクト、河川水源保護プロジェクト、水力発電のための水源開発プロジェクト、低地からの排水システムプロジェクト、灌漑プロジェクト、水害防止プロジェクト、洪水対策プロジェクト「サルの頬」、ダム建設プロジェクトがあります。

6. 通信に関するプロジェクト　地方での整備、改良や、バンコク都内の渋滞問題解決プロジェクトがあります。

7. 社会厚生に関するプロジェクト　生活を営む居住地を確保、質を改良できるよう、国民を援助するプロジェクトです。

8. その他のプロジェクト　開発研究センタープロジェクト、海岸浸食を防ぐ防波堤建設プロジェクトや、発明の分野で、「チャイパタナ水車」は、汚水に酸素を送り込み水質を改善します。

プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートは、仏歴 2559 年（西暦 2016 年）10 月 13 日、15：52 に、88 歳 313 日で亡くなりました。

ソムデットプラジャオユーフア・マハーワチラーロンコーン・ボディンタラテーパヤワラーングーン（仏歴 2559 年から現在）（ラーマ 10 世）

仏歴 2495 年（西暦 1952 年）7 月 28 日に生まれました。仏歴 2559 年（西暦 2016 年）10 月 13 日、チャクリー王朝の第 10 代タイ国王に即位し、現在に至ります。プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートとソムデットプラナーンジャオ・シリキット・プラボーロムラーチニーナートの間の唯一の男子です。姉のトゥーングラモムイン・ウボンラッタナラーチャカンヤー・シリワッタナーパンナワディーと、二人の妹、ソムデットプラテープラッタナラーチャスダーサヤームボーロムラーチャクマーリーとソムデットプラジャオルークトゥージャオファーチュラポーンワライラックアッカララーチャクマーリーがいます。

仏歴 2559 年（西暦 2016 年）10 月 13 日、プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの崩御を受け、国民議会議長は、皇太子に国王への即位を要請しました。これは、仏歴 2515 年（西暦 1972 年）12 月 28 日に、皇太子としての名称、ソムデットプラボーロマオーラサーティラート・サヤームマクットラーチャクマーンを付与したプラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデート（ラーマ 9 世）の意向に沿ったものです。ソムデットプラボーロマオーラサーティラート・ジャオファー・マハーワチラーロンコーン・サヤームマクットラーチャクマーンは、チャクリー王朝の第 10 代タイ国王に即位し、正式名はプラジャオユーフア・マハーワチラーロンコーン・ボディンタラテーパヤワラーングーンとなりました。

タイ・日関係の歴史

はじめに

日本とタイの関係は、約 600 年前に遡ります。タイとの関わりについて、日本人は、慶長から寛永にあたる仏歴 2152 年から 2173 年（西暦 1609 年から 1630 年）のことを聞くことが多いです。両国は関わりを持ち「御朱印」と呼ばれる船でタイを訪れ、当時の王都アユタヤーに日本人町を作ったということや、握浮哪純広、城井久右衛門そして山田長政などの日本人の活躍についてです。当時、多い時で約 3,000 人の日本人がタイに住んでいました。民間の交易の他に、「徳川家」の将軍とアユタヤー王朝の王による政府間の献上品や書簡のやり取りもあったとされていますが、正式な国交を基礎としたものではありませんでした。しかし、家康将軍時代の鎖国により、タイを含む外国との交流は停止されました。しかしながら、仏歴 2299 年（宝暦6 年にあたる西暦 1756 年）までシャムからの貨物船が長崎へ入港していた記録が残っています。

時代別の両国の関係

1. アユタヤー時代、プラジャオソンタムは仏歴 2131 年から 2154 年（西暦 1588 年から 1611 年）に在位しました。日本の慶長、寛永または仏歴 2116 年から 2146 年（西暦 1573 年から 1603 年）の「安土桃山時代」と呼ばれる時代です。この時代、仏歴 2152 年から 2173 年（西暦 1609 年から 1630 年）徳川将軍が「御朱印船」を送りました。タイを訪れた日本人は、当時の王都アユタヤーに日本人町を作りました。握浮哪純広、城井久右衛門そして山田長政など、日本人の活躍もあり、多い時で約 3,000 人の日本人がタイに住んでいたとされています。

「江戸時代」仏歴 2146 年から 2411 年（西暦 1603 年から 1868 年）家康将軍は、現在の東京である江戸に幕府を開きました。仏歴 2182 年（西暦 1639 年）家康将軍は、鎖国を発令し、タイを含む外国との交流は停止されました。しかし、仏歴 2299 年（宝暦6 年にあたる西暦 1756 年）までシャムからの貨物船が長崎へ入港していた記録が残っています。

2. ラタナコーシン時代　仏歴 2396 年（西暦 1853 年）、アメリカ海軍のマシュー・カルブレイス・ペリー代将が 4 隻の軍艦を率いて東京湾に現れました。翌年仏歴 2397 年（西暦 1854 年）、マシュー・カルブレイス・ペリー代将は再び現れ、日本にアメリカ、ロシア、イギリス、オランダと

の和親条約を締結させることに成功し、日本は鎖国を放棄しました。その4年後、これら条約は、通商条約に変えられました。

プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフア（ラーマ5世）は仏歴2411年（西暦1868年）に即位しました。ちょうど、明治天皇の治世でした。（明治天皇より一つ年下です。）明治時代は、タイの近代化の初期でもありました。

タイと日本は国交を再開しました。仏歴2430年（明治20年にあたる西暦1887年）、日暹修好通商に関する宣言（日・タイ修好宣言）の調印により、正式に国交が開かれました。両国が国交を結び、通商・航海を奨励し、将来の条約をもって詳細を規定するという内容でした。また、これは、明治の日本政府が東南アジアの国と結んだ最初の条約でした。正式に効力が生じたのは批准を交わした後の、翌年仏歴2431年（西暦1888年）でした。9年後、仏歴2440年（明治30年にあたる西暦1897年）稲垣満次郎が初代タイ駐在日本公使に着任しました。（初代日本駐在タイ公使はプラヤー・ルッティロンロンナチェート少将でした。） タイ駐在公使に着任後、稲垣公使は、通商・航海に関する条約締結のため、交渉し、仏歴2441年（明治31年にあたる西暦1898年）、「日本暹羅修好通商航海条約」を締結することができました。

仏歴2475年（昭和7年にあたる西暦1932年）、ルワン・ピブーンソンクラーム少将、プリーディー・パノムヨン、法務省官僚の率いる軍人、官僚グループによる政変が起きました。タイは、絶対君主制から立憲君主制へと政変しました。

仏歴2484年（西暦1941年）日本とタイは、公使館から大使館に昇格させました。タイは中立政策を宣言しました。

仏歴2491年（昭和23年にあたる西暦1948年）日本が外国数か国との通商を開始した後、タイ政府は、精算勘定方式(Open Account)による通商の交渉のため外交団を日本に送りました。輸出入する物品の金額目標を、輸出入それぞれにつき3千万ドルに定めました。この合意に基づく、日本の輸入品で最も高額なものは、タイ米30万トンでした。日本からの主な輸出品は、鉄道車両のボギー台車、繊維、雑貨などでした。タイは、以前、目黒にあったタイ大使館に同盟本部を置き、外務省ヨーロッパ局の局

長サガー・ニンガムヘンを同盟本部の駐在大使に、仏歴 2492 年（西暦 1949 年）10 月まで就かせました。

仏歴 2495 年（西暦 1952 年）以降、タイを訪れる日本人の数は、年々増えていきました。仏歴 2498 年（西暦 1955 年）には、文化面の合意を締結し、両国の関係は、より強くなっていきました。両国の要人による公式訪問も行われ、同年 4 月には、タイの首相プレーク・ピブーンソンクラーム少将が日本を訪問し、仏歴 2500 年（西暦 1957 年）には、岸内閣総理大臣がタイを訪問しました。

仏歴 2506 年（昭和 38 年にあたる西暦 1963 年）5 月、プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートは、ソムデットプラナーンジャオ・シリキット・プラボーロムラーチニーナートを伴って、日本を公式訪問しました。

プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデート、ソムデットプラナーンジャオ・シリキット・プラボーロムラーチニーナートは、日本訪問時、天皇陛下、皇后陛下と写真を撮りました。

仏歴 2507 年（昭和 39 年にあたる西暦 1964 年）12 月、皇太子明仁親王は、美智子妃を伴って、タイを公式に答訪しました。これにより、両国の外交関係は、より強くなり、経済発展のための協力が生まれました。日本は、IMF を通じた 40 億ドルの援助、日本円の貸付、新宮澤構想、日本輸出入銀行（日本輸出入銀行と OECF が統合し、現在の JBIC となる）からの信用貸し、貿易保証、無償支援、学問分野での協力など、広く援助し、これら援助の総額は、140 億ドルを超えます。日本は、タイを援助した国々の中でトップです。

要人往来

1. 仏歴 2543 年（西暦 2000 年）7 月 25 日、ソムデットプラ・テープラッタナラーチャスダーサヤームボーロムラーチャクマーリーは、日本の明仁天皇の母、皇太后の葬場殿の儀に出席しました。唯一の外国人参列者でした。仏歴 2544 年（西暦 2001 年）8 月、タイの大学より名誉博士号を受けるため、秋篠宮親王、親王妃紀子がタイを訪れました。同年 9 月、学習院大学より名誉博士号を受けるため、ソムデットプラ・テープラッタナラーチャスダーサヤームボーロムラーチャクマーリーが日本を訪れました。そして、10 月には、ソムデットプラジャオルークトゥージャオファーチュラポーンワライラックアッカララーチャクマーリーが日本を訪れました。

2. 国の指導者による訪問は、仏歴 2542 年（西暦 1999 年）10 月に、チュワン・リークパイ首相が日本を公式訪問しました。また、小渕恵三総理大臣が、ASEAN 諸国訪問の際、タイを正式訪問しました。

経済的な関わりについては、タイの経済的発展により、日本からのタイへの投資は拡大しています。一般的に、タイ人は日本人に対し、良い感情を抱いています。仏歴 2540 年（西暦 1997 年）に、日本の外務省が ASEAN 5 か国を対象に実施した意識調査(「ASEAN Study V」)によると、タイ人の 98%が、日本は友好国であると考えていました。この様な意識により、タイは、日本に対し最も良い印象を持つ国となっています。政府レベル、ビジネスレベルでも、タイ人が日本の支援を褒め称えていることは明らかです。

タイの経済、社会、政治の全体像

スコータイ時代、アユタヤー時代やラタナコーシン時代、昔のタイ経済構造は、自給自足経済でした。しかし、仏歴 2398 年（西暦 1855 年）頃、ラーマ 4 世の時代に、資本主義に大きく変わりました。

(1) 独占貿易を廃止し、自由貿易に変えました。「プラカランシンカー」と呼ばれた政府機関による独占貿易を終結し、イギリスや西洋諸国の商人が、タイの商人と直接売買できるようになりました。その結果、タイと西洋諸国との交易が拡大しました。

(2) 自給自足から商売のための生産に変わりました。米はタイの重要な輸出品となりました。

(3) 仏歴 2403 年（西暦 1860 年）、商品交換、売買の便宜性を高めるため、機械で硬貨を製造する造幣局を設立しました。

ラーマ 7 世の時代の仏歴 2475 年（西暦 1932 年）、世界恐慌により、世界市場へのタイ製品の輸出が落ち込みました。タイの輸出品目が、チーク材、錫などと限られていたからです。そのため、仏歴 2475 年から 2504 年（西暦 1932 年から 1961 年）にかけて、国による資本主義経済が誕生しました。政府は、工業生産の拡大を促進しなければなりませんでした。また、織物、たばこ、紙、酒など、政府が直接生産したものもありました。

第二次世界大戦の終戦後、民間の役割が大きくなりました。国の発展のため、タイ国家経済社会開発計画が用いられました。初のタイ国家経済社会開発計画は、仏歴 2504 年（西暦 1961 年）に用いられ、その結果、タイの経済構造は変わりました。

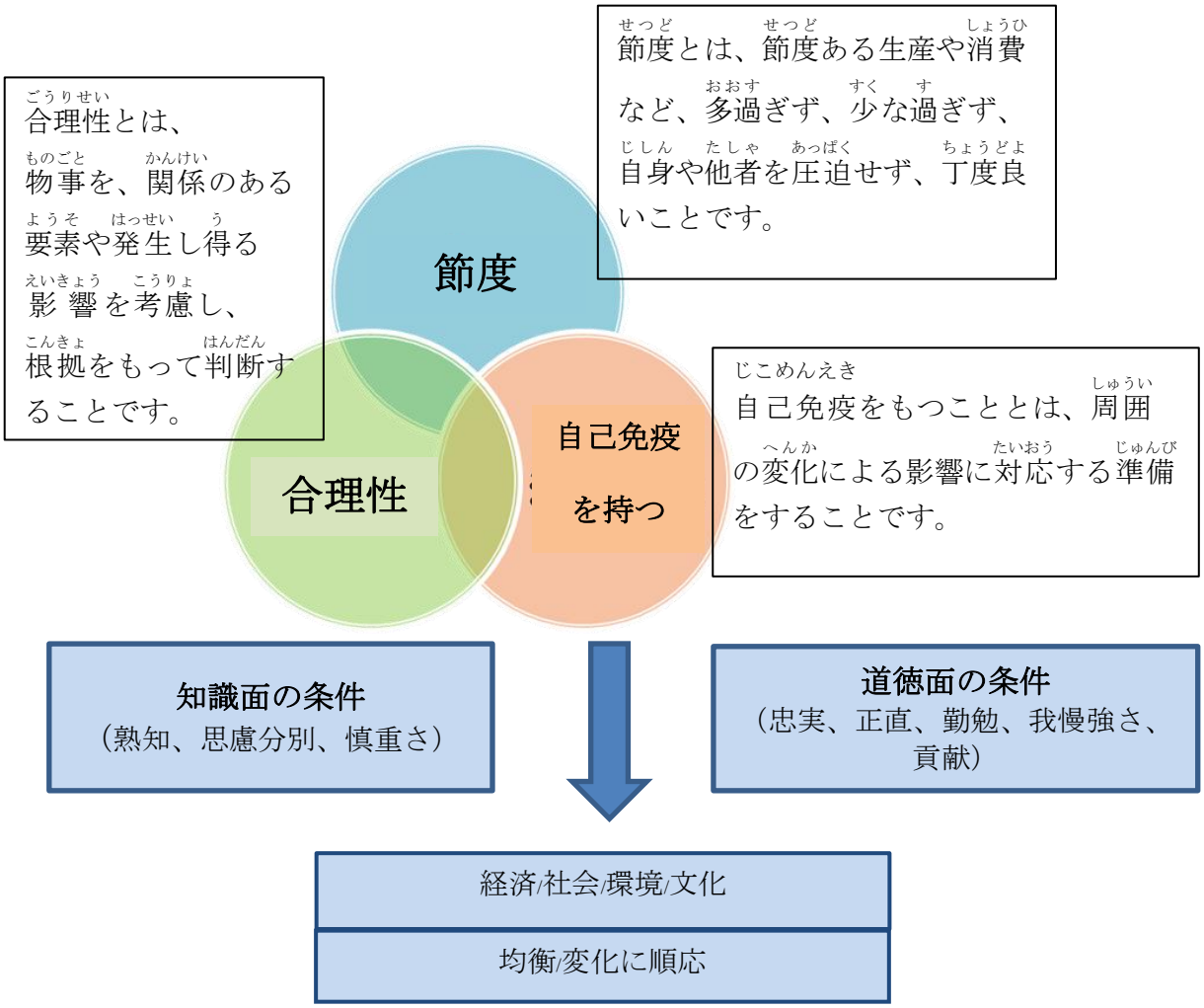
(1) 以前は、農産物は、米、チーク材、ゴムしかありませんでしたが、その後、とうもろこし、キャッサバ、サトウキビ、果物など、商品が増え、また、とりわけ、農産物の加工産業が発達しました。同時期に、近代的な機械や生産技術も多く導入されました。

(2) 工業製品とサービス（商業銀行、観光、ホテル）が急激に増えました。外国との取引も拡大し、輸出、輸入ともに商品の金額が大きくなりました。以前は、農作物しか無かった輸出品も、現在は、国の主な収入源となっている自動車部品、パソコンや電気回路の部品など、工業製品の種類が増えました。

急激な経済発展により、タイは新たな工業国となりました。工業、サービス産業のどちらからも収入を得ています。主な収入は、パタヤ、プーケット、バンコク、チェンマイなど、タイに多くある有名な観光地からのものです。サービス産業による大きな収入を生み出しています。仏歴2555から2557年（西暦2012から2014年）にかけて、タイの経済は、年に約5%と、大きく成長しました。そのため、仏歴2557年（西暦2014年）の一人当たりの国民総生産(GNP Per Capita)は、年間一人当たり約196,240バーツまたは6,041アメリカドルとなり、タイは、高中所得国(Upper Middle Income Country)になりました。

世界経済の変化とタイ経済の不安定さに加え、度重なる自然災害の影響を受け、プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートは、急速な変化の中でも人々が長く、安定し、安全に生活を営めるよう、仏歴2517年（西暦1974年）以降、長い間、タイ国民に向けて、生活の指針「足るを知る経済(セータキットポーピアン)」を提唱してきました。

足るを知る経済(Sufficiency Economy)は、家族、コミュニティから国に至るまでの全てのレベルにおける国民の生活指針です。国の発展、運営、特に世界における様々な変化に追い付くための経済発展において、極端に走らず中道を行くようにします。充足とは、節度、合理性と、内外的な変化による影響への自己免疫を持つことの必要性のことです。また、様々な学問を用いて各手順の計画、実施するにあたり、熟知、思慮分別、慎重さも必要となります。また、同時に、国民の心的基盤も築かなければなりません。特に、政府職員、理論家、実業家は、どのレベルであっても、道徳意識を持たなければなりません。



節度とは、節度あるレベルの生産や消費など、多過ぎず、少な過ぎず、自身や他者を圧迫せず、丁度良いことです。

合理性とは、充足のレベルに関して、関係のある要素や発生し得る影響を包括的に考慮し、根拠をもって判断することです。

自己免疫をもつこととは、近い将来、遠い将来に発生し得る事態を想定し、様々な変化や影響に対応する準備をすることです。足るを知る経済哲学は、国民、コミュニティ、社会、国家に働きかけるため、国の発展おいて重要です。

タイ社会の全体像

仏歴 2560 年（西暦 2017 年）現在、タイの人口は、合計 6,500 万人です。うち、男性が 3,200 万人、女性が 3,300 万人です。タイ人は友好的で、いつも、温かい笑顔で挨拶します。挨拶するときに見られるポーズは「ワイ」です。タイは、異なる文化の人々も受け入れる柔軟性があり、幸福感を持ちながら共存できる国です。

社会の重要な機関には次のものがあります。

1. 家族　現代のタイ人の家族は、その多くが夫、妻、子の 核家族で、場合により使用人が一緒に暮らしています。しかし、祖父母、父母、子・孫の何世代もが一緒に暮らす多世代家族も少なくはありません。

2.　宗教および教育機関　仏教がタイに入ってきたのは、仏歴 236 年（西暦以前）のことでした。タイ人の多くは仏教を信仰しています。タイの社会は、仏教と強く結びついています。新年、ワンカオパンサー、ワンオークパンサーなど重要な祭日に、タイ人は徳を積むために寺院に参り、戒律を守ります。大きな町では旅行者も、ロウソク献納パレード、ロケット・フェスティバルなどを見ることができます。タイ人は、日常的に、説教を聞くため、宗教儀式を行うため、僧に敬意を示すために集まります。学校、公共の貯水池や道路の建設など、僧侶は、田舎の発展に重要な関わりを持ちます。寺院は、田舎の人々の集会所として、村にとって重要な機関です。現在、西洋の人々の仏教への興味が高まってきています。仏歴 2508 年（西暦 1965 年)、世界中の仏教徒の中心とするため、世界仏教徒連盟(WFB, World Fellowship of Buddhists)の本部がタイに設置されました。

教育の面では、アユタヤー時代、仏教の教えを学ぶため、教育は寺院の中に限られていました。タイの風習で、タイの男性は、仏典を学ぶために二十歳を超えると出家し、仏教僧になることが多いです。

現在、タイの義務教育は、タイの子どもは遅くとも 7 歳には教育を受け始めて、少なくとも中等教育（中学 1 年から 3 年）までは受けなければなりません。中等教育終了後、生徒は、職業専門教育を選択することができます。義務教育は、初等教育 6 年（初等教育 1 年から 6 年)、中等教育 6 年（中等教育 1 年から 6 年）に分けられる基本教育の一部です。6 年の中等教育終了後、大学で高等教育を受けることができます。

3.　経済機関　タイの田舎の人々の多くは、農家です。稲作、畑、農園、家畜を育てるなど、農業に関する職業に就いています。経済的に重要

な国の輸出品の 90% は、米、ゴム、トウモロコシ、チーク材、ジュート 、キャッサバなどの農作物です。

4. 王室機関 タイの王室機関は、昔から、全国のタイ人の団結力の集約地点の様なところです。プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの治世からも見て取れます。タイ人は、プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの誕生日である 12 月 5 日を、毎年、「父の日」とし、この大切な日に、自らの「父親」を訪ねたり、感謝します。

タイの社会制度(Society system)は、一般的に、地方社会(Rural Society)と都市社会(Urban Society)の 2 つの制度に分けられます。

地方社会(Rural Society)の特徴

地方社会は、大半が農業を営む民俗社会(Folk Society)です。労働力での協力に頼らなければならないため、互いに親しくなります。また、楽しむことを好むので、民間伝統行事で、よく一緒になります。

都市社会(Urban Society)の特徴

タイの都市社会は、発展と生活費の高さから、競争が激しいです。ビジネスの特徴を持った社会で、様々な職業があります。社会の中での、顔を合わせることや結びつきを持つことは少ないです。また、地方社会ほどは伝統行事を重視しません。外国の文化・社会から強く影響を受け、順応しています。

タイの統治、政治は、絶対君主制でしたが、プラバートソムデット・ポッククラオ・ジャオユーフアの治世に、プレーク・ピブーンソンクラーム元帥の政府、人民党による革命が起こり、国王を元首とする立憲君主制へと政変が起こりました。また、国家信条（ラッタニヨム）1 号を発布し、仏歴 2482 年 6 月 24 日、国名、国民の呼称、国籍を「シャム」から「タイ」に変えました。その後、仏歴 2557 年（西暦 2014 年）5 月 22 日、仏歴 2550 年タイ王国憲法の停止、ならびに仏歴 2557 年（暫定）タイ王国憲法の施行を発表しました。この憲法の中には、タイは立憲君主制ならびに国王を元首とする民主主義とも言う議員内閣制民主主義の制度統治をとると、書かれています。

行政機関は次の 3 つに分けられます。

1. 立法権には、220 名以下の議員で構成される国民立法議会があります。人民代表院、元老院、国民議会の役割を果たします。任期は定められていません。

2. 行政権には、国民立法議会による決議と国王によって任命される首相と、首相によって指名され、国王によって任命される 35 名以下の大臣が居ます。内閣は行政機関で、任期は定められていません。首相が最高権限を持つ行政府の長です。

3. 司法権には、司法裁判所、憲法裁判所、行政裁判所で構成される司法制度があります。最高裁判所長官、憲法裁判所長官、行政裁判所長官が長を務める行政機関です。

初代首相

プラヤー・マノーパコーンニティターダー

現首相（29 人目）

プラユット・ジャンオーチャー

タイの統治体制は、単一国家です。憲法と同一法律のもと、国内外での統治権の行使は全国で同様に行われます。国内の統治は、地方行政へ統治権が分散されていて、中央も、県、郡に分割する地方も、全土の国民の福祉が配慮されています。憲法と全ての行政法において、タイの統治体制は、国王を元首とする民主主義体制であると規定されています。タイ国民は、民主主義の原則に則り、政治的に自由です。

タイの文化と観光

生活様式、地域の知恵、文化遺産、伝統行事、これら観光資源は、タイ人らしさ(Thainess)を表し、観光、休暇に訪れようとする国内外の旅行者の興味をひいています。同時に、旅行者は、それぞれの観光地で、新たな知識、経験の機会を得ることができます。そのため、ガイドは、旅行者がそれぞれの観光地を知り、で適切な行動をとるため、旅行者にタイの文化に関するアドバイスをするべきです。

タイ文化とは

タイ文化とは、思考、信仰から生まれた、昔から何世代も受け継がれた地域それぞれのタイ人の生活様式、習俗のことです。住居、衣服、食事、薬、言語、信仰などが有り、「地域の知恵(Local Wisdom)」と呼びます。また、これら地域の知恵は、社会の状況に応じ融合、変化してきました。そして、社会から広く認められ、タイ人共通の特徴となり、現在まで受け継がれ、「タイ文化(Thai Culture)」となりました。

様々なタイ文化が生まれたのは、地形や気候の異なるタイの各地域に、様々な民族が定住したからです。各地域のタイ人が、それぞれに異なる文化を生み出してきました。しかしながら、住居（家・寺院・宮殿）に関する文化、服飾文化、米文化（タイ料理、菓子)、信仰・宗教文化（祭りや伝統行事)、タイ芸術（建築、彫刻、絵画、工芸)、言語およびタイ文字など、独自性をもったタイ人共通の文化を示すものもあります。

旅行者が知るべきタイ文化

1. 住居（家・寺院・宮殿）
2. 米文化（タイ料理、菓子）
3. 民間信仰・宗教文化（祭りや伝統行事）
4. タイ芸術（視覚芸術、舞台芸術）
5. 言語ならびに文学
6. 服飾

1. 住居（家・寺院・宮殿）に関する文化

以前、タイ人は、住居を意味する「ルアン」という言葉を使うことを好みました。ルアンクルアンプーク、ルアンクルアンサップなどです。一方、「バーン」という言葉は、住居（ルアン）が何戸もある村や集落を意味します。バーン（村）バーンラジャンやバーン（村)、クローンバーンルアンなどです。しかし、現在は、それらを合わせて「バーンルアン」と呼

びます。昔、タイ人はバーンルアン（住居）を川沿いの平地に建てました。タイ人は交通に陸路よりも水路を多く使っていました。また、日常生活にも川を使っていました。バンコクやアユタヤー県の川、運河沿いに住居が見られることから、後に「東洋のベニス」と呼ばれるようになりました。道路が建設され、交通に道路が主に使われ始めると、タイ人は、現在見られるように、主要道路の両側に住居を建てるようになりました。住居の特徴は、地域ごとに異なりますが、「木造」が好まれることは、共通しています。地域ごとの木が使われますが、チークなどが好まれます。

現在、住居建築は、レンガやセメントなど、耐久性のある素材を使い、より現代的なものになっています。しかし、タイ人の住居に関する言い伝えは、今日も残っています。例えば、「家は北または南向きに建て、太陽を受けない、つまり西または東向きにしない。階段は右回りつまり時計回りにする。寝るときは東または南向きにし、西または北向きにしない。カヌン、マカーム、マヨムなど、縁起の良い植物を植える。」などです。

「ワット（寺院）」とは、仏教の儀式を行う場所のことです。元々は「アーラーム」と呼んでいました。現在は、併せて「ワット・アーラーム」と、よく呼ばれます。ワット（寺院）は、昔から、タイ人の生活様式に結びついていました。ワット（寺院）は、人々が集まり、社交、相談する集会所です。また、学校ができるまでは人々に知識を与える場所でもありました。そして、仏教を信仰するタイ人の心のよりどころでもあります。タイの国教は仏教ですが、他の宗教や民間信仰のタイ人とも共に平和に暮らしています。

ワット（寺院）は、タイ人からも外国人からも人気のある文化的観光資源です。ワット（寺院）には、ワットラーサドーンとワットルアンの２種類があります。ワットラーサドーンは、仏教に捧げるため、国民が建てた寺院です。ワットルアン（王室寺院）は、国王、王妃、または王族が、建立、修復または復興した寺院です。寺院の名前から区別することができます。例えば、ワット・ベンチャマボーピットドゥシットワナーラーム・ラーチャウォーラウィハーンは、ラーマ５世の時代に建てられた第１級ワットルアン（王室寺院）です。名称の最後に「ラーチャウォーラウィハーン」とついていて、これは、ワットラーサドーンの名前にはありません。また、ワットルアン（王室寺院）には格付けがありますが、中でも重要なラーマ１世から９世の御用達寺院である寺院は、次の８か所です。

- ワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラーム・ラーチャウォーラマハーウィハーン　ラーマ１世プラバートソムデット・プラプッタヨートファーチュラーローク・マハーラートの御用達寺院
- ワット・アルンラーチャワラーラーム・ラーチャウォーラマハーウィハーン　ラーマ２世プラバートソムデットプラプッタルートラーナパーライの御用達寺院

- ワット・ラーチャオーロサーラーム・ラーチャウォーラウィハーン ラーマ 3 世プラバートソムデットプラナンクラオジャオユーフアの御用達寺院
- ワット・ラーチャプラディット・サティットマハーシマーラーム・ラーチャウォーラウィハーン ラーマ 4 世プラバートソムデットプラプラジョームクラオジャオフアの御用達寺院
- ワット・ラーチャボーピット・サティット・マハーシーマーラーム・ラーチャウォーラウィハーン　ラーマ 5 世プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフアの御用達寺院
- ワット・ボウォンニウェートウィハーン・ラーチャウォーラウィハーン　ラーマ 6 世プラバートソムデット・プラモンクットグラオジャオユーフアの御用達寺院
- ワット・ラーチャボーピット・サティット・マハーシーマーラーム・ラーチャウォーラウィハーン　ラーマ 7 世プラバートソムデット・プラポッククラオ・ジャオユーフアの御用達寺院
- ワット・スタットテープワララーム・ラーチャウォーラマハーウィハーン　ラーマ 8 世プラバートソムデットプラジャオユーフアアーナンタマヒドンの御用達寺院
- ワット・プララームガーオ・カンチャナピセーク　ラーマ 9 世プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの御用達寺院

王御用達の 9 寺院全て、それぞれの王に所縁(ゆかり)があります。多くは、王が建立、修復、または王が出家した寺院です。治世が終わると、遺骨(いこつ)または遺灰(いはい)を御用達寺院の本尊(ほんぞん)の台座(だいざ)に安置(あんち)します。

寺院の中は、プッターワートとサンカーワートの、ふたつのゾーンに分かれます。プッターワートは、寺院の本尊を安置するための布薩堂(ふさつどう)または本堂を建てるための場所です。布薩堂(ふさつどう)と本堂の違いは、布薩堂(ふさつどう)には、建物の 4 方向または 8 方向に結界石(けっかいせき)が置かれていますが、本堂には、寺院の聖域の結界を示す結界石(けっかいせき)または石板(せきばん)はありません。また、プッターワートには、仏舎利(ぶっしゃり)や、王など貴人の遺骨を安置するための建物である仏塔(ぶっとう)または塔堂(とうどう)があります。人々は、布薩堂、本堂または仏塔、仏堂内の仏像を拝むため、プッターワートに入ることができます。一方、サンカーワートは、庫裏(くり)または、その寺院の僧侶の居住する場所を建てるための場所です。独自の特徴をもち、タイ文化の仏教の中核(ちゅうかく)とされているのが、ワット・シーラッタナーサーサダーラーム（ワット・プラケーオモラコット）です。王宮の敷地内に建てられています。居住する僧侶は居ないので、サ

ンカーワートは無く、プッターワートしかありません。ガイドは、旅行者に、寺院に立ち入る際の相応しい服装や言動をアドバイスするべきです。

宮殿は、王や王族の住居です。タイ人の王室機関への忠誠心は、タイ文化をよく表すものの一つです。過去から現在に至るまでの王の恩情（おんじょう）によりタイ人は、タイ人であることに誇りをもっています。現在も、王室の慈悲により、タイ人そして外国からの旅行者は王や王族の住居である王宮、宮殿、御用邸（ごようてい）や、偉業（いぎょう）を見学することができます。

お寺や宮殿はタイ文化の根底にある民間信仰や宗教を表す建築、彫刻、絵画を見ることができ、タイ芸術の学習の場と言えます。

2.米文化（タイ料理、菓子）

タイ人の主食は米です。米は、全ての地域のタイ人共通の文化と言えます。タイ人の日常的な食事で、米とおかずは欠かせません。よく好まれるおかずは、ナムプリック（ディップ）と生野菜です。また、肉やそれぞれの地域の植物で作る汁物、炒め物、カレー、揚げ物も好まれます。タイ料理は、地域の特徴に応じて食材や味付けが異なり、多種多様です。パッタイ、クッティオなど、タイ料理は旅行者にも人気です。中国の麺クッティオを使っていますが、その麺もまた、米から作られています。

第二次世界大戦の頃、米は高価なものでした。そこで、タイ政府は、米よりも安いクッティオを食べるように働きかけました。タイ人は、濃い味を好むので、クッティオを卵、豚、干しエビと、タマリンドの汁、砂糖で味付けして炒めたのがパッタイで、現在も、とても好まれています。トムヤムクンは、旅行者が最も多く口にしている料理です。トムヤムクンは、タイ料理本来の特徴をもった料理です。体に良いハーブを食材、味付けに使います。これ以外にも、マッサマンカレーも、とても人気のある料理です。マッサマンカレーは、マレー地域の影響を受けた料理で、スパイスや味付けに、その影響がみられます。また、タイ東北地方の郷土料理であるソムタムも国内外の旅行者に大変好まれています。

タイのお菓子は、粉類、ココナッツミルク、砂糖で作られ、甘く、なめらかです。ロートチョーン、カノムチャン、カノムピヤックプーン、タプティムグループなどは、タイ本来のお菓子です。一方、トーン・イップ、トーン・ヨート、フォーイ・トーンは、西洋菓子の影響を受けて卵を使ったお菓子です。アユタヤー時代にポルトガルと日本の混血（こんけつ）でターオ・トーンキープマーの官位（かんい）を与えられた王室の菓子部長が、これらのお菓子を創造したと言われています。いずれにせよ、タイ料理もお菓子も、主な

材料は粉類で、その原料の多くは米ですので、米はタイ人の主食と言えます。また、タイ文化を強く表すものでもあります。

3. 民間信仰・宗教（祭りや伝統行事）

民間信仰とは、社会の中の人々の思想のことで、その信仰に則った行動や儀式が見られます。また、社会的に受け入れられ、受け継がれ、その社会の伝統となっています。一方、宗教には、説明可能な道理、教義が有り、主義の伝承者がいて、儀式を執り行うための場所が有るというところが民間信仰とは異なります。しかしながら、民間信仰も宗教も、古くからのタイ人の精神的文化で、平和に暮らすタイ人の心のよりどころとなっています。

12 か月間の伝統行事に関するタイ文化は、民間信仰や宗教が根底にあります。ワンマーカブチャー、ワンウィサーカブチャー、ワンアーサーラハブチャー、ワンカオパンサー、ワンオークパンサーなどは、仏教に関する重要な日です。一方、民間信仰に関する伝統行事は、ワンソンクラーン、ワンローイクラトン、ワンサートタイなどです。伝統行事の大半は、受け継がれてきた儀式に則り、執り行われます。そして、娯楽の要素があれば、祭り（テーサカーン）と呼ばれます。例えば、ソンクラーン祭りは、まず儀式として、必ずお寺で徳を積みます。砂をお寺に奉納し、仏像を聖水で清めます。その後は、水を掛け合って楽しみます。ローイクラトン祭りの儀式は、お寺で説教を聞き、川の女神に奉納するための灯篭を作ります。その後は、花火などをして楽しみます。

タイの旧正月ソンクラーンは、古くから受け継がれてきました。
以前は、天文学により日付が決められていましたが、
現在は、毎年 4 月 13 から 15 日に固定されています。

タイは地域ごとに異なったお祭りや伝統行事がありますが、その多くは、タイ人の生活に結びついたものです。例えば、田植え、稲刈り、稲魂

に関する行事や、水源の精霊、稲田の精霊、プーセ・ヤーセ鬼神、祖霊を祀る儀式など、地域の神聖なものへの敬意を示すための行事です。更には、民間信仰や宗教に関係の無い行事もあります。例えば、チェンマイの花祭り、ルーイの綿花祭り、王宮広場（サナームルアン）の凧祭りなど、旅行者に人気のあるものとお祭りにしたものもあります。

4. タイ芸術（視覚芸術、舞台芸術）

タイ文化の発達が感じられ、旅行者が好むタイ独特の文化が、美の文化と言えるタイ芸術で、タイ本来の伝統に則ったもの、また中国、ミャンマー、フランス、イタリアなどの文化を融合したタイ建築（住居、寺、宮殿）、仏像や偶像など宗教からインスピレーションを受けた彫刻や、ワット・プラシーラッタナサーサダーラームの回廊のラーマキエン物語画や、ワットポーの名で有名なワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラームの世界の記憶にも登録された信仰、伝統、古典医療についての壁画が例に挙げられる、寺院や王宮など重要な建物の壁に描かれた絵画があります。

タイの演劇芸術は、復興され旅行者にもよく知られるようになった仮面舞踏劇コーン、影絵劇ナンタルン、棒使い人形劇チュート・フンクラボークなどの高度な芸術もあれば、大衆劇リケー、歌謡歌垣ラムタット、伝統音楽モーラム、伝統楽器モーケーン、南部の踊りラムノーラー、弦楽器サローソスンなど地域ごとの舞台、演劇芸術もあります。

仮面舞踏劇コーン、影絵劇ナンヤイ
ワットポーの名で知られるワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラームの本堂の壁画

5. 言語ならびに文学

タイのコミュニケーション文化には、興味深い特徴があります。スコータイ王朝のラームカムヘーン大王の治世から、タイ独自の言語であるタイ語と文字があります。王は、古モン文字とクメール文字を融合し、ラーイスータイを考案しました。現在のタイ文字は、ラーイスータイを発展させたものです。タイ全土で公用語として用いられていますが、地方ごとに異なる方言やイントネーションが用いられています。また、地域によっては、その土地の昔ながらの文字を用いるところもあります。

言語と文字により、ラーマキエン、サントーン、プラアパイマニー、朗誦クンチャーン・クンペーンに代表される散文詩や韻文または物語、民話など、タイ文化の特徴である様々な文学が生まれました。ガイドはこれら文学作品を、それぞれの観光地に関連付けて紹介すると、旅行者の興味をひくことができます。

海外からの旅行者は、よくガイドから、挨拶、お礼、料理の注文に使うタイ語を習おうとします。そこでガイドは旅行者に正しく、また相応しいマナーを教えるべきです。例えば、挨拶であれば、サワッディーカー/ クラップと言いながら合掌すること、または、時と場所に応じて感謝や謝罪の言葉を述べることです。

ラームカムヘーン大王碑文

6. 服飾

タイの服飾文化は、昔から発達してきました。タイの地域それぞれに多種多様です。綿や絹など天然の素材を使い、美しい模様に織り上げています。　中部では男性も女性も一枚の布をズボンのように穿くジョングラベンを好みます。北部、南部や東北部では、女性は腰巻スカートのシン、男性は腰巻のサロンを好みます。タイ人の服飾文化は、タイの布を身に着けることを推奨されてきましたが、現在、タイ社会や国際社会の背景に応じ、大きく変化してきました。しかしながら、タイの服飾は、状況や時と場所に応じることが基本です。例えば、寺院や重要な場所を訪れる際、ガイドは礼節を重んじた服装を身に着けるよう、旅行者にアドバイスするべきです。

タイの硬貨や紙幣の図柄について。全ての硬貨と紙幣の表面は、ラーマ 9 世プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの肖像画です。裏面は、寺院や宮殿などタイの重要な建物の絵や、タイの王の肖像画です。

昔は、女性も男性もジョングラベンを好む、服飾文化がありました。

まとめ　タイの文化は、全てのタイ人の心のよりどころである機関に関係しています。それは、仏教機関を心に留め、平安を保つため社会の中での自身の振る舞いのよりどころとする文化です。

タイと近隣諸国とのつながり

タイと近隣諸国との色々な面での関係性は、タイを含むアジアの国々からの旅行者の関心事です。タイからラオス、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、マレーシアへの車の旅や、タイのトラート県からカンボジアのシアヌークビル、ベトナムの港町へ、またはミャンマーのミェイクからプーケットを結ぶ船の旅、または、シンガポールからタイ、カンボジア、ベトナムへの鉄道の旅と、車や鉄道の陸路や船によるルートが、東南アジア、アジアの諸国のいたるところに張り巡らされています。

Asean　Connect は、とても重要です。様々な文化交流、学習の機会となるからです。タイを通じた Asean Connect は、次の様に分類されます。

北部

タイと近隣諸国との国境は、メーサイ、タチレクは、チェンラーイ県の標高の高い土地とミャンマー連邦共和国を結ぶ国境です。タチレク周辺の人々の生活様式が見られるのは、カレン首長族の村、翡翠市場、ワット・プラヨックカーオ、プラ・サームミティ、ミャンマーではワット・タイヤイと呼ばれる広大でとても美しい寺院のワット・プラジャオラケン、また、高い山の上に建てられたシュエダゴン・パゴダのレプリカからは、タイ側とミャンマーの景色を見ることができます。これ以外にも、船でラオスに渡ることができるチエンセーン郡は、船によるメコン両岸の観光を繋ぐ地点です。チエンセーンは、古い歴史を持つ重要な貿易の町でした。ラーンナー周辺と、ラオス側の、現在はキングスローマンズと呼ばれる重要商業地域の周辺とを繋いでいました。

チエンセーンから南下すると、13 号線のチエンコーン、フエイサイ国境があります。また、この道は、ルアンナムター地域など、重要な観光地へも行くことができます。そして、ベトナムのサパへも繋がり、重要な商業地域を繋ぎます。また、チエンセーンは、景洪市、シップソーンパンナーなど、中国のメコン流域の船着場の町とを繋ぐ地点でもあります。車や飛行機の旅以外の、もう一つの旅の形式です。

もう一か所、興味深い国境は、ナーン県のフアイゴーンです。重要な観光地である世界遺産の町ルアンパバーンへの入り口として、タイのナーン県とラオスのサイニャブーリー県を繋ぐ、恒久的に開かれた国境です。

中北部には、ラオスとの国境のウッタラディット県プードゥー国境があります。観光地であるサイニャブーリー県パークラーイと結ぶ LIMEC と呼ばれるルートです。ティアン池、ワット・シーブンルアン、パンタム・ナムトゥン地域あるいはウィアンゲオ村の工芸や説教祭ブン・パウェート、ピータコーンのパレードなど、旅行者の興味をひき、サイニャブーリー県に立ち寄りたい思わせる観光地があります。これ以外にも、旅行者によく知られるサイニャブーリーの観光イベントがあります。例えば、サイニャブーリーの有名な伝統行事であるマハーガムブンチャーンでは、ジャンボクイーンコンテスト、象のパレード、象の魂振り儀礼バーイシー・スークワン・チャーンなどが行われます。また、ルアンパバーンや首都ヴィエンチャンへも繋がっていて、移動も便利です。更に、プードゥー国境と呼ばれる地域と、タイの重要な町である世界遺産スコータイやウッタラディット県との約 300 キロの距離を短時間での移動が可能で、また、世界遺産の町ルアンパバーンへの移動も便利です。そのため、プードゥー国境は、両国の世界遺産を繋ぐ重要な中継地点であり、また世界遺産を通じて両国の歴史を学ぶ上でも重要な場所です。

東北部

重要な国境はルーイ県のターリー国境です。興味深い観光地の中継地点です。バンコクからターリー国境を越えた後、タートクワンシー滝、タートセー滝や、ワット・プラマハータート・ラーチャボウォラウィハーン、旅行者に人気の王室寺院ワット・シエントーンまたはプーシーの仏塔など、自然的、文化的両方の観光地があるルアンパバーンへたった 4 時間で行くことができます。また、ターリー国境を使うルートは、首都ヴィエンチャンへも快適に行くことができます。

ノンカーイは、初めてタイ＝ラオス友好橋が建設された重要な国境です。タイとラオスの首都ヴィエンチャンを繋ぐ、経済、商業の入り口です。また、現在はラオスで免税品や工芸品の買い物、プラタートルアン、凱旋門パトゥーサイ、ワットホーパケオなどヴィエンチャンの名所観光し、タイに戻ってくる City　　tour 形式の観光が実施されています。これは、ノンカーイ県と首都ヴィエンチャンの双子都市形式の観光で、最も人気のあるルートのひとつです。

現在、ナコンパノムから橋でメコンを渡り、国境を越えるルートが開かれました。これは、9 号線を通るルートで、別名「ロマンチック街道」と呼ばれる、とても美しいルートです。また、ベトナムのヴィンなど、海側まで行くことができます。澄んで、とても美しい海です。これらは、現時

点で、タイとラオスやベトナムなどの近隣諸国を最短距離で結ぶルートです。

主要ルートのひとつで、政府の East-West Corridor（東西回廊）方針の対象となっているのが、ムクダハーンと、ラオスのサワンナケートと呼ばれる地域を通り、12 号線でフエ、ダナン、ホイアンに向かうルートです。旅行者は、明命帝、来遠橋、タンキーオールドハウス、ドラゴン橋など、感動的な観光地を見ることができます。3 か国を結ぶだけでなく、ピサヌローク県、スコータイ県、タク県、そして、カイン州のパアン、モーラミャインと繋がる経済特区メーソート郡に続いています。East-West Corridor（東西回廊）は、ミャンマーの西側の海からベトナムの海まで重要な 5 か国を繋ぐ、商業上大きな意味を持つ海から海へのルートのひとつです。また、このルートは東北部の中心地であるコンケーン県にも繋がっています。コンケーン県は、町をセミナーや会議の場として活性化させる MICE政策に力をいれています。

東北部で人気のあるルートは、ウボンラーチャタニーのチョン・メック国境です。ラオス南部のチャンパーサック地域とを結びます。ラオスの世界遺産プラーサート・ワット・プーを目にすることができます。また、コーンパペン滝、リーピー急流など美しい滝や急流がある魅力的な自然のルートです。更にこのルートは、ベトナムのホーチミンや、美しい自然や海のダラットやムイネーにも繋がっています。

東部

タイとカンボジアの商業ルートや重要なルートで有名なのは、サケーオ県アランヤプラテートです。世界遺産の町アンコールワット、アンコールトムと関連の歴史上の町があるシェムリアップとを繋ぎます。世界的な観光地で、世界中から集まった旅行者は、過去から現在までの特徴的なクメール式芸術に魅了されます。また、このルートはカンボジアの首都プノンペンや、ベトナムの海側の町で、美しい自然文化のあるダラットやムイネーへも繋がっています。

南部

重要な近隣国であるマレーシアとの国境は、ソンクラー県サダオ国境です。ペナン、マラッカ、そして、マレーシアの首都クアラルンプールへ行くことができます。更に、シンガポールまでも繋がっていて、植民地時代の古都、歴史、文化に併せ、現代文化で華僑ムスリムの文化である、ババ、ヤヤーも見ることができます。マレーシアのムスリムと共通の文化を持つタイ南部と繋がっています。

ラノーン県の国境からは、ミャンマーの「エメラルドハート島」の名で知られるコータウンへ行くことができます。これらは、タイと双子都市の近隣諸国との観光ルートです。このルートは、ドーム島、ランピ島海洋国立公園など、ミャンマーの色々な海や、歴史の面では、バインナウン王の像、カバーエーパゴダなどに行くことができます。ラノーン県の国境は、ミャンマーの自然豊かな景色をリラックスして楽しむ旅のために、重要な中継地点です。

西部

重要な国境は、ミャワディに繋がるターク県メーソート郡の国境です。モーラミャインや、チャイティーヨー・パゴダ、更に、国のシンボルでもあるシュエダゴン・パゴダを見に、ヤンゴンへ行くことができます。この観光地の名高い美しさを見に、数多くの旅行者が訪れます。また、メーソート郡からのこのルートは、カレン族の村や、その他の土地にも繋がっています。

現在、より重要性が高まり興味深い国境が、カーンチャナブリー県のスリー・パゴダ・パスです。死の鉄道に関係する歴史ある都市、ダウェイへ、国境を越えて行くことができます。ミャンマーに繋がる第二次世界大戦の頃の出来事に関するタイの重要な観光地でもあります。また、ミェイク、タニンダーリ地方域に繋がるプラチュアップキリカン県シンコン国境からは、双子都市の文化、伝統、昔の商業の中心地、自然溢れる美しい海に触れる短期観光ができます。

タイをスタート地点の中心とする観光ルートは、近隣諸国の観光地を繋いでいます。タイは、飛行機、自動車、その他輸送機関における輸送のハブです。また、通信においても便利なことから、観光、世界遺産都市、歴史的貿易ルート、自然、更に観光地それぞれの土地の文化、伝統に関する知識を高めるための選択肢のひとつとなっています。

タイ：エコツアーの終着点

王の足跡をたどる 23 の自然保護観察旅行(Eco-Tour)

プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートは、世界で最も優れたエコツーリスト(THE GREATEST ECO-TOURIST OF THE WORLD)のひとりです。王による王室プロジェクトと通じた開拓の足跡をたどることは、あらゆる地域の自然、生活様式、コミュニティ、文化に触れる機会となります。

ラーマ 9 世プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートの足跡をたどる、特徴的なエコツアーは、以下になります。

1.1 王の足跡をたどる北部エコツアー

1. ドイトゥン開発プロジェクトのエコツアールート プラシーナカリンタラーボーロマラーチャチョンナニーのご意向の元での森林保護とタイ山岳民族、北部のタイ人の芸術、文化、生活様式伝承のためのルートです。

ティーントックプロジェクトのエコツアールート フアイゲオ郡メータクライ国立公園の森に触れる、農業体験などを目的とした観光ツアー(agro-tourism)で、しいたけ、コーヒー、寒冷地の花の栽培をします。

2. チェンマイ県、フアイホンクライ王立開発研究センターのエコツアールートリビング・ミュージアムを見学し、フタバガキ科の常緑高木樹林、混合落葉樹林の大きな森の生命の息吹に触れ、北部スタイルの農場の生活様式や水源と土壌の開発を見学するためのルートです。

3. チェンマイ県アンカーン王立農事試験場のエコツアールート ラーマ 9 世プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートのご意向の元に「ケシの山」から、寒冷地の野菜や花の栽培地帯に変わりました。ヒマラヤザクラのピンク色の花や、植えられたイチゴを眺め、山岳民族のバラ園をサイクリングします。

4. サジュック村、サキアン村高地農業開発プロジェクトのエコツアールート 広大な棚田の美しい谷を眺め、イチゴ、桑の実、無農薬野菜を収穫し、ナーンのドイクン山頂の水源の森を見学します。

5. パヤオ県の王室プロジェクトであるパンカー開発センターのエコツアールート メコン川を下り、ゲンパーダイ急流の眺めや、プー・チーダオ山の霧を眺めます。また、ウォー・ワチラメーティー僧のライ・チューンタワンでの瞑想や、プー・ランガー山頂からの景色を眺めたり、モン族の生活様式に触れることができます。

6.　メーホンソーン県パーイ川流域の開発、サービスセンターのエコツアールート　リビング・ミュージアムの見学や、足るを知る経済の思想の 9 つの基盤、すなわち、森林、山火事の管理、水・土・肥料・米・植物・漁業、畜産の管理、農場の管理に則った生活様式の見学をします。また、ユンライの霧や、ドイギウロム、フアイ・ナムダンの景色を眺めたり、象乗り、いかだ下り、また美しい自然に触れることができます。

1.2　王の足跡をたどる東北部エコツアー

1.　コンケーン県、カラシン県のシリントーン博物館のエコツアールート　原始世界、生物誕生、恐竜の絶滅、地質学の知識、Big　Bang 理論の学習や、ワット・プーダオ、ワット・ルアンプーキアンでのプラプッタニミットレックライ仏の参拝、プレーワー絹織物センター、プータイ族、プラタートヤークー仏塔、ファーデート・ソンヤーン町の見学ができます。

2.　ブンカーン県ブンコーンロン貯水池灌漑プロジェクトのエコツアールート　プートーク登山、高僧ジュアンの遺骨を納めた仏塔参拝、ブンコーンロン貯水池見学や、ジェットシー滝の虹、タムプラ滝、プーシン山、ノーンクットティン池でのクルージング、ワットポーチャイ寺でのプラサイ仏参拝ができます。

3.　ブリラム、スリン、シーサケート観光ルート　パノムルン遺跡、ムアンタム遺跡、サッカー競技場のアイモバイル・スタジアム、ブリラム・キャッスルや、象のショー、象使いグイ族の文化、バンタクラン村エレファント・ヴィレッジ、ターサワーン村の織物を見学できます。

1.3　王の足跡をたどる中部エコツアー

1.　カーンチャナブリー県ナレースワン大王記念碑を訪れるエコツアールート　ナレースワン大王時代のタイの歴史を学びます。象が軍事用に使われた戦場の雰囲気に触れ、ナレースワン大王記念碑、チェディユッタハッティーを参拝します。泰緬戦争、第二次世界大戦時代のヘルファイア・パス・メモリアル博物館、死の鉄道、ムアンシン歴史公園、ワット・プラテンドンランウォラヴィハーンなど、カーンチャナブリー県の観光地を訪れます。

2.　チャチュンサオ県カオヒンソーン王室開発研究センターのエコツアールート　天然資源の土、水、木の回復工程、農業開発を見学し、ワット・ヤンサンワララームや、カオシーオーン山の野生動物保護区シリジャルーンワット林を訪れます。また、パナットニコム集落のかご編みを見学できます。

3.　プラチュワップキーリーカン県シリナートラーチニー・マングローブ林生態系研究センターのエコツアールート　放棄されたエビ養殖場を人の手によってマングローブ林に復活させた奇跡やプラーンブリーの河口の林の開発、また、ペッチャブリーのパルミラヤシを育てる人々の生活様式を見学します。ドヴァーラヴァティー時代の仏像ルアンポーダムを参拝し、チャンフアマン王室プロジェクト、農業試験場を見学、シリナートラーチニー研究センターでマングローブ林の生態系を学びます。

4.　ペッチャブリー県レームパックビア研究開発センターのエコツアールート　自然のメカニズムで汚水を浄化する研究です。河口付近の自然を学ぶルートを歩き、沢山の種類の鳥たちを観察します。植物や草を使った汚水の濾過システム、人工湿地システムやベチバー、ガマなど植物を使った浄水システムを学びます。

5.　スパンブリー県タイ人の生活様式学習センターのエコツアールート　米と米農家の生活様式を学び、ルアン・プラメー・ポーソップ、ルアン・チャオナーを見学します。そして、稲作に関する知識として、米の種籾について学びます。

1.4　王の足跡をたどる東部エコツアー

1.　ラヨーン県、チャンタブリー県、トラート県チャルムブーラパーチョンラティット通りのヌーンナーンパヤー眺望地点のエコツアールート　チャルムブーラパーチョンラティット通りにある眺望地点からタイで最も美しい長さ 100 キロを超える景色を眺めます。曲がりくねった道のある緑の山と横に挟まれた海の写真を撮ることもできます。ヌーンナーンパヤー眺望地点へは、ラヨーンのプラセー河口からチャンタブリー県のクンウィマーン湾、クンクラベン湾への途中に、車または自転車で来ることもできます。

2.　チャンタブリー県クンクラベン湾開発研究センターのエコツアールート　緑豊かなマングローブ林と、王室プロジェクトのクンクラベン湾開発研究センターを訪れ、サメー、ラムプー、ゴーンガーン・バイレック、ゴーンガーン・バイヤイなど 30 種類以上あるマングローブの生物多様性を学びます。海風を感じながら、タキアン・トーン材で作られた全長 1. 8 キロのマングローブ林観察遊歩道を歩き、10棟の東屋を意味する東屋を訪れます。海洋生物の繁殖や樹木の保護を見学し、漁師の生活様式を学びます。

この生きている自然博物館は、旅行者に奇跡の様な生物学的均衡の本質を知る機会を与えてくれます。

3.　チョンブリー県植物遺伝の保護プロジェクト、タイ島と海自然史博物館のエコツアールート　サメーサーン市カオマージョーにあるタイ島と海自然史博物館を見学します。ここはタイで初めての地質学、植物学、海洋生物学についてまとめ、展示する場所で、ソムデットプラテープラッタナラーチャスダーサヤームボーロムラーチャクマーリーのご意向の元での植物遺伝の保護プロジェクトの一環です。船で、サメーサーン島へ渡ったり、サッタヒープ海軍基地のウミガメ保護センターでカメを海に放流することもできます

4.　ラヨーン県トゥンプローントーンのエコツアールート　パークナムプラセー市自治体と地域住民の力で回復した、マングローブ林の完全な生態系があるパークナムプラセー周辺のエコツアー観光地について学びます。ラヨーン県で最も広いマングローブ林の生態系のバランスを整え、環境保護分野の観光地に発展させました。全長 2 キロの木製の遊歩道を歩き、生物の多様性や、サメータブーンダム、ラムプーン、ゴーンガーン、プローンデーンなど、マングローブ林の木の種類を学びます。とりわけ、葉っぱが黄色く輝くプローンの木が密集するトゥンプローントーンは、日が差すと、全方向を囲むゴーンガーンの木の鮮やかな緑色の中に、金色に輝くプローンの風景が現れます。また、夜には、ラムプーンの木に集まる蛍の瞬きを見ることができます。

1.5　王の足跡をたどる南部エコツアー

1.　クラビ県クラビ漁業研究開発センターのエコツアールート　水生生物飼育繁殖研究開発センターや、新種の魚の開発のための形質転換を見学します。プラーカトゥーンと呼ばれるクマノミは、13 種類もの飼育に成功しています。その他にも、ベタ、フグ、ブダイ、ロブスター、なまこなどを飼育しています。汽水域ターポム・クローン・ソーンナム、ノッパラットターラー・ピピ諸島自然公園の貝の化石スサーンホイラーンピーを訪れることができます。また、天然温泉の滝や、森の中のモラコット池で泳ぐこともできます。

2.　チュムポーン県チュムポーン島のエコツアールート　タイで最も美しく完全なマングローブ林のひとつを訪れます。200 キロにおよぶ海岸の、きれいな海で泳ぎ、40 もの島を眺めます。チュムポーン諸島国立公園には、マングローブ林、山、ビーチ、海、サンゴ礁をみるためのシュノーケリングスポットの島々があります。マングローブ林を散歩したり、マングロー

ブ林の中をカヤックで行ったり、タイ最大の砂丘サーイバーンブートを見ることができます。

3.　ナコーンシータンマラート県パークパナン流域開発プロジェクトのエコツアールート　ラーマ 9 世プラバートソムデット・プラパラミンタラ・マーハープミポンアドゥンヤデートによる森林破壊、酸性土壌、環境、洪水問題解決のためのパークパナン流域開発プロジェクトです。海水の浸食を防ぐ水門や、貯水池または灌漑用に川をせき止めたダムを建設しました。また、ワット・プラマハータート・ウォラマハーウィハーンを参拝し、パークパナンのツバメの巣マンションや、パークパナン流域開発プロジェクトの水門を見学します。

4.　ナラティワート県シリントーン泥炭湿地林自然調査研究センターのエコツアールート　タイで最も広い泥炭湿地林を訪れます。完全な泥炭湿地林を持つ自然について学ぶルートです。タイ最南端ハーラー・バーラー森林野生動物保護区の豊かな森を歩きます。サイチョウの全 12 種類中、9 種類はタイで発見されました。泥炭湿地林の生態系に関する展示を見学し、鳥を観察します。

必ず訪れるべき土地

TAT（ティー・エー・ティー）と呼ばれるタイ国政府観光庁は、タイ全土から、旅行者が絶対に行っておくべき美しい土地として、必ず訪れるべき 12 の土地を選びました。また、旅行者が近隣の土地を訪れられるよう、双子都市が、必ず訪れるべき 12 の土地プラスとして、更に発表されました。5 つの地方、全てから美しい土地が選ばれました。

1. 北部からは、次の 6 つの県です。

1.1 ランパーン県とランプーン県（時が止まったかのような街）
1.2 ペッチャブーン県とピサヌローク県（霧の中の花の山）
1.3 ナーン県とプレー県（愛をささやくサムーダーオ）

1.1　ランパーン県（時が止まったかのような街）とランプーン県　このふたつの双子都市は、北部で最も古い街です。ランパーンは、花馬車の街です。花馬車に乗ってランパーンの街を巡ると、新しい発見があります。コースは小回り、大回りと様々です。

- ナコーン・ランパーン駅　駅舎は、北タイの建築様式とヨーロッパの建築様式が融合した建物で、最も保存状態の良い建物のひとつに選ばれました。
- 鶏の絵柄の丼　100 年以上受け継がれてきた職人技です。ランパーンの街のシンボルとなっています。
- ワッタナータム通り　ランパーンの人々の生活様式に触れることができます。また、この通りは、毎週金曜日、歩行者天国「ガート・ムアクアレーン」が開かれます。
- ワット・プラタート・ランパーン・ルアン　長年、ランパーンに立ち続ける寺院です。ワット・ポンサヌックは、ハリプンチャイの時代から、ランパーンの重要な寺院です。ユネスコの文化遺産保全賞を受賞しました。ワット・シーローンムアン、ワット・プラケオ・ドーンタオ・スチャートラーム、ワット・チェディ・サーオラン、タイで最も大きいミャンマー寺院ワット・シーチュム、ワット・プラタート・ジョームピン、ワット・チャルームプラキアット・プラジョムクラオ・ラーチャヌットがあります。
- バーン・サオナック　ビルマ式とラーンナー式が融合したチーク材の古代木造建築の家です。116 本もの柱が、現在まで完全な形で残っています。
- 歩行者天国ガート・ゴンター　古い町並みがクラシックな雰囲気を醸し出します。
- ホープームラゴーン博物館　ランパーンの旧名ケラーン・ナコーンからの興味深い歴史背景が展示されています。

時が止まったかのような街　ランパーン県
ランパーンのシンボル花馬車に乗って街を巡ると、新しい発見があります。

1.2　ペッチャブーン県（霧の中の花の山）とピサヌローク県　朝霧と高山の花を満喫

- プー・タップブーク　ペッチャブーンで最も高い山です。プー・タップブーク高山植物園、タイで最も美しい寺院のひとつであるワット・プラタート・パーソンケオがあります。
- タイ人にとって重要な仏像チンナラート仏　チンナラート仏は、ピサヌロークのワット・プラ・シー・ラタナ・マハタートに安置されています。
- カオ・コー、身を挺して戦った戦死者を弔うために建てられたカオ・コー犠牲者慰霊碑、ラッタナイ貯水池。石の上に層をなして流れる水が美しいシーディット滝は、一年を通して見ることができます。トゥン・サレーン・ルアンは、松林に囲まれ、朝霧や、そびえたつ山など、自然派の旅行者には最高の場所です。
- ナム・ナーオ国立公園　ペッチャブーンで最高に大自然を満喫できる場所です。洞窟、滝、眺望地点、紅葉を楽しむことができます。

ペッチャブーン県で最も高地に住むモン族の村の名前でもあるプータップブークは
ペッチャブーン県で人気の土地　ペッチャブーン県ロムカオ郡

1.3　ナーン県とプレー県（愛をささやくサムーダーオ）　ナーン県は、今も息づく古代都市、偉大な山の伝説と、特徴的な文化があります。ナーン県とプレー県は、人々の素朴な生活様式を映し出す、水流模様を意味する織物パー・ラーイ・ナムライや銀製品などの工芸品が有名です。ワット・プーミンの世界的に有名な愛をささやく絵、壁に描かれた不朽の絵画プーマーン・ヤーマーンがあります。

- ワット・プラタート・チェー・ヘーン　ナーンで最も人気のある仏舎利塔であるだけでなく、卯年の守護仏舎利塔でもあります。
- 王室寺院のワット・プラタート・チャーンカム・ウォラウィハーン
- ナーン国立博物館　ナーンの歴史で満たされています。タイで唯一の黒象牙もあります。ナーン・リバーサイド・アート・ギャラリーには、ナーン出身の芸術家の芸術を愛する心が集まっています。
- ドイサムーダーオ（シーナーン国立公園）この山の上で満天の星の光を浴びることができます。
- クン・サターン国立公園では、ピンクの花が山脈を覆います。
- 1148 号線は、ナーン県ターワンパー郡とパヤオ県チェンカム郡を結ぶタイで一番美しい道路です。
- 塩井戸ボーグルアは、大変珍しく、山奥で井戸から汲み上げた塩水を昔ながらの方法で煮詰めて塩を作っています。（ボーグルア郡は、ナーン市街地から約 80 キロのところにあります。）
- プア郡は、手つかずの自然が残る、穏やかで住みやすい可愛らしい土地です。
- ドイプーカー国立公園　運が良ければ、年に一度だけ咲く美しい花チョンプー・プーカーを見ることができます。

世界的に有名な愛をささやく絵、壁に描かれた不朽の絵画プーマーン・ヤーマーン
（ナーン県ムアン郡プーミン村　ワット・プーミン内）

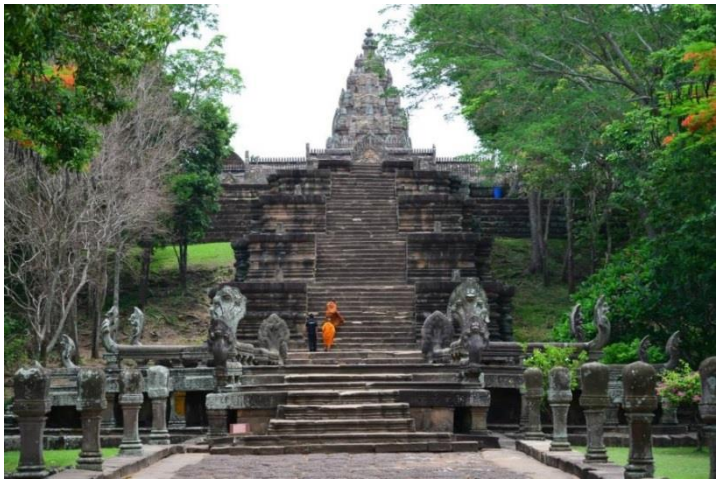
2. 東北部からは、次の 4 つの県です。

2.1 ブリラム県とスリン県（2 つの時代の城の町）

2.2 ルーイ県とチャイヤプーム県（最も涼しく...幸せのルーイ）

2.1　ブリラム県とスリン県（2 つの時代の城の町）は、過去の荘厳さを感じさせる石城（せきじょう）が多くある土地です。

- チャルムプラキアット郡パノムルン遺跡（いせき）公園　火山の頂上に位置する、最も美しいお城であり、朝日が 15 の門を貫く奇跡が起こります。プラサート・ムアンタムもあります。
- サーン・ラックムアン　ブリラムの人々の信仰心の集まる神聖な場です。
- カオグラドーン火山森林公園　火山が休止し、自然豊かな休憩場となりました。
- ナーポー郡絹織物（きぬおりもの）村　ブリラム独特の、裾（すそ）が赤い絹の腰巻スカートのシンや、平織りのパーマイ・ハーンクラローク、下衣のパー・ヌン、肩掛けのパー・クルムライ、絣（かすり）織りのパー・マットミーなど、高品質の織物があります。
- ワット・グラーン。プラアーラーム・ルアンは、ブリラムの街に昔から有る古刹（こさつ）です。
- 「パー・プーアッカニー」は、バーンチャルンスック村の人々による火山灰で染めた綿織物です。神聖な火山灰を染めの原料に使います。火山灰で染めた綿織物は、タイで他にはありません。着心地（きごこち）が良く、また、縁起物（えんぎもの）でもあります。



パノムルン遺跡公園　ブリラム県

2.2 ルーイ県とチャイヤプーム県（最も涼しく...幸せのルーイ）

- プールア国立公園、プーロムロー、プークラドゥン、プーパーポ、プートーク、ケーンクットクー
- 仏舎利塔(ぶっしゃりとう)プラタート・シーソンラック、ワットポーチャイとピータコーン博物館、ワットネーラミットヴィパッサナー、チェンカーンの人々に人気の古刹(こさつ)ワットシークンムアン、ワットシーポーチャイバーンセーンなどがあります。

モーヒンカーオ　チャイヤプーム県

プークラドゥン　ルーイ県

3. 中部からは、次の 4 つの県です。

3.1　サムットソンクラーム県とナコンパトム県（川の流れと時の流れの調和した街）

3.2 ラーチャブリー県とスパンブリー県（アートの街）

3.1　サムットソンクラーム県とナコンパトム県（川の流れと時の流れの調和した街）　必ず訪れるべき運河沿いの生活様式　ナコンパトム県の重要な場所ワット・プラパトムチェーディー・ラーチャウォーラマハーウィハーンは、釈迦(しゃか)（プラ・ゴータマ・プッタチャオ）の仏舎利(ぶっしゃり)が安置されていると信じられています。

- バーン・ノイ水上マーケット、ター・カー水上マーケット、アムパワー水上マーケット、バーン・プラップ地区、船上マッサージのハッターターラー
- ワット・バーンガポームでは、浅浮彫の壁画を鑑賞することができます。
- バーンノックの聖母生誕大聖堂は、キリスト教徒の信仰の中心地です。
- 古くからの市場タラートガオ・バーンノッククウェーンは、別名、傘をたたむ市場とも呼ばれています。

- ワット・バーンクンは、菩提樹に覆われた布薩堂(ふさつどう)が有名です。
- ラーマ 2 世記念公園には、美しいタイ式家屋があります。

アムパワー水上マーケット　サムットソンクラーム県

3.2　ラーチャブリー県とスパンブリー県（アートの街）　寺院の本堂に見られる芸術、伝統的な影絵劇(かげえげき)ナンヤイ、現代アート、キッズアート、ラーチャブリー県初の現代美術館 D(ディー)　Kunst(クン)アートギャラリーがあるアートの街です。

- タオ・ホン・タイ陶磁器、ラーチャブリー国立博物館、チェットサミアン 119 年市場、影絵劇(かげえげき)ナンヤイ、ワット・カノーン
- ワット・コンカーラームの壁画は、壁に描かれた荘厳(そうごん)な歴史的絵画です。
- サイアム蝋彫刻(ろうちょうこく)園では、まるで生きているかのような蝋細工(ろうざいく)が見られます。
- スワンプン郡、バーン・ホーム・ティアン
- 人気観光地メーホンソーン県パーンウン村に対してスパンブリーのパーンウン村と称されるのが、自然が美しい観光地フップカオウォンの貯水池です。水族館と動物園のブンチャワーク・チャルムプラキアット、昔ながらの市場サームチュック・ラタート・ローイピー、ワット・パー・ルーイライ、プトゥーイ国立公園やワット・パイローンウアがあります。

影絵劇ナンヤイ展示館
スパンブリー県

バーン・ホーム・ティアン　ラーチャブリー県

4. 東部からは、次の 4 つの県です。

4.1 トラート県とラヨーン県（夢の島）

4.2 チャンタブリー県とサケーオ県（多種多様な果物の楽園）

4.1　トラート県とラヨーン県（夢の島）　澄んだ海、美しい砂浜。竹やシュロで編んだ帽子ンゴープを始め、金色のトラート・パイナップルなど、トラートは他には無い特徴的な街です。また、ラヨーン県特産の果物は、ドリアンやマンゴスチンなど、多種多様です。

- サラックコーク村では、穏やかな漁師の生活に触れることができます。丸木舟でトラート・ビーチのゴーンガーンの木が茂るマングローブ林を巡ります。バーンチューン・ビーチ、ラーチャガールン・ビーチ、クート島、カーム島、ダート島もあります。
- ラヨーン県のバーンペー・ビーチ、メーラムプン・ビーチ、カオチャマオ・カオウォン国立公園、カオチャマオ滝、セーンジャン・ビーチ、サメット島、タル島。
- トラート県の古刹（こさつ）ワット・ブッパーラーム。博物館には興味深い歴史が詰まっています。

サメット島　トラート県

果樹園　チャンタブリー県

4.2　チャンタブリー県とサケーオ県（多種多様な果物の楽園）　チャンタブリー県には、甘くジューシーで美味しいトロピカルフルーツの幸せ溢れる果樹園があります。また、穏やかで美しい海と、温かい漁師の生活に触れることができます。

- クンウィマーン・ビーチ、チャオラーオ・ビーチ、ヌーンナーンパヤー眺望地点、ルアンポー・プラユーン眺望地点
- タイ最大の宝石＆ジュエリーセンター　貴石・宝石市場、伝説の宝石取引市場、タイ最大です。
- カトリック大聖堂
- プリウ滝国立公園、王室プロジェクトのクンクラベン湾開発研究センターの見学。そよ風に吹かれながら、木製の歩道橋から、チャンタブリーで最も完全なマングローブ林の生態系を観察します。タークシン大王の祠、トゥックデーン、レームシン・ビーチ。
- サケーオ県の観光地は、サドック・コック・トム城遺跡、タープラヤー国立公園、ペットポートーン洞窟、パーンシーダー国立公園や、多彩な商品が売られ、またインドシナへの入り口でもあるロングルア市場などがあります。

サドック・コック・トム城遺跡　サケーオ県

5. 南部からは、次の 6 つの県です。

5.1 トラン県とサトゥーン県（美食の饗宴）

5.2 チュムポーン県とラノーン県（悠久の美しい砂浜）

5.3 ナコンシータマラート県とパッタルン県（仏法を説く街）

5.1　トラン県とサトゥーン県（美食の饗宴）　平和で穏やか、そして美食の街です。皮がカリカリと香ばしいトラン焼き豚、大ぶりの点心、真ん中の穴が特徴のしっとりふわっとしたケーキ、中華まんなど、独自の食文化があります。中国ポルトガル文化の建物、商業エリアを見学できます。

- レー・カオコップ洞窟、マンコーン公園、ワンテープターロー、プラノーン・ソン・スートノーラー涅槃仏、ワット・プーカオトーン、カオ・チャーンハーイ洞窟、曲がりくねった旧道跡カオパップパー、プラヤー・ラッサダーの小さい記念碑参拝。
- パークメン・ビーチ、エメラルド色の光が射す「ウモーン・セーン・モラコット」、プー・パーペット洞窟、リーオペ島、ヒン・ンガーム島、カイ島、ヒン・ソーン島、アーダン島、美しいダイビングスポットのラーウィー島、レステーコードーン洞窟、サトゥーン県のトゥンワー古代象博物館。

5.2　チュムポーン県とラノーン県（悠久の美しい砂浜）　チュムポーンの海は美しく、シュノーケル、ダイビングのどちらにも適しています。海の中は、数多くの種類のサンゴ礁やイソギンチャク、魚の群れと天然資源が豊富です。

- カオ・ディンソー自然研究センター：毎年 10 月には、タカの渡りを観察することができます。暖かい風に乗り、20 万羽を超える大出現が発生します。
- ディンソー山眺望地点、マッシー山眺望地点は、必ず訪れるべき眺望地点です。美しく澄んだ海原を眺めることができます。（パティウ郡）
- 海軍大将プラボーロマ・クロムルアンチュムポーンケートウドムサックの記念碑であるチュムポーン王子の廟。廟は、サーイリー・ビーチを湾全体に渡って、はっきりと眺めることができる、海に向かって置かれたルアン・プラルアン戦艦の上にあります。（ムアンチュムポーン郡）
- タムトン＝バーンブート・ビーチ、サーイリー・ビーチ、アルノータイ・ビーチ、カーブに沿って広がる美しい砂浜のトゥンウア・ビーチ。
- チュムポーンのピタック島と、ラノーンのパヤーム島。
- 65℃のお湯が湧き出るラクサワリン温泉は、ラノーン県のシンボルでもあります。

5.3　ナコンシータマラート県とパッタルン県（仏法を説く街）　ナコンシータマラートは、カノムジーンなどの食べ物や、影絵芝居チュート・ナン・タルン、伝統舞踊マノーラ、ニエロ細工などの文化面でも南部らしさの原型と言える土地です。

- 仏塔の先端が黄金のワット・プラマハータート＝ウォーラマハーウィハーンや、聖教量（しょうぎょうりょう）のクラーイ住職のワット・タートノーイ
- 影絵劇ナン・タルンのスチャート・サッパシン氏の家、国立博物館、キリウォン村。
- クルンチン滝、カローム滝、カノーム・ビーチのピンクイルカ、ヒンンガーム・ビーチ、サーイケーオ・ビーチ、ナイプラオ・ビーチ、シチョン・ビーチ、タルムプック岬、空のように高いカオルアンからのナコンシータマラート随一（ずいいち）のパノラマビュー。
- パッタルン県最古の寺院ワット・タムクーハーサワン、ソンクラー湖の北にある淡水湖タレーノーイのタレーノーイ水鳥公園、カオチャイソン郡のターンナムイェン温泉、カオプー・カオヤー国立公園。

仏法を説く街　ナコンシータマラート県

400 里の美しい砂浜　チュムポーン県

タイ観光の傾向

未来研究家が、仏歴 2560 から 2570 年（西暦 2017 から 2027 年）の期間のタイ観光の傾向を次の様に予測しました。

1. 注目される特殊観光

1.1 高齢者向け観光、長期滞在型観光、障がい者向け観光　タイの市場でも、海外の市場でも注目される商品・サービスとなる傾向にあります。特に、高齢や公務員の定年退職者は、最高レベル(High　End)のターゲット市場です。

1.2 健康、医療観光　世界中の人々の健康への配慮(はいりょ)が高まる傾向にあります。タイは、スパ、マッサージ、ハーブ、ヨガに関する商品・サービスがあり、健康のための観光の目的地として傑出(けっしゅつ)しています。さらに、タイは、費用が高すぎず、医療サービスは国際基準を満たしている、サービス精神(Service　Mind)を持った人材、特に、医療サービスは、タイ医療と中国医療の融合した医療からの選択肢があること、また、瞑想(めいそう)など精神的な健康回復、精神発達に関する観光などから、現代医療観光の目的地にもなっています。

1.3 ビジネス・トラベルの一つの形態Mice(マイス)は、海外からの旅行者がタイを訪れる(Inbound)商品・サービスです。宿泊、食事、サービス共に、適正価格で国際基準を満たしていることから、国際レベルの会議開催地に適しているとして、注目されています。

1.4 スポーツ、イベント面の観光(Sport/Event　Tourism)　タイは、ヨーロッパ、アジア、オーストラリアの中心に位置(location) し、アセアンへの玄関口(gateway)なので、アセアンレベルや世界レベルのスポーツ競技大会開催の地に適しています。国際基準のサッカー競技場、自動車競技場、オートバイ競技場が有るだけでなく、パタヤ、プーケット、フアヒンは、ボート・ヨットレース(Regatta) などマリンスポーツ競技大会開催に適しています。また、ゴルフ、バドミントンなどのスポーツ競技大会で、多くの外国人旅行者がタイを訪れています。

2. 自然派観光(Nature tourism)

国立公園の観光は、陸の生態系や、常緑樹林(じょうりょくじゅりん)、熱帯多雨林(ねったいたうりん)、丘陵性常緑林(きゅうりょうせいじょうりょくりん)、沼沢林(しょうたくりん)、マングローブ林など、様々な種類の森林、また海洋生態系、浜辺の森林、植物、陸上の生物、水生生物など、様々な生物、ソンクラー湖、ボーラペット湿地など川、湿地、運河に見られる淡水の生態系を学習するためです。タイには、北部の石灰岩(せっかいがん)の山脈、ドイ・イ

ンタノン山の山頂観光や、東北部のコラートやサコンナコンの砂岩の高原、世界的な稲作地帯である中部の沖積平野、そして南部には、インド洋アンダマン海と太平洋南シナ海タイランド湾の間に横たわる半島など、様々な地形があり、ジオツーリズム(GEO-TOURISM)に適しています。

自然派観光の人気アクティビティとして、ハイキング、樹木やハーブの観察、バードウォッチング、天体観測、川下り、森林植樹、マングローブ林植樹、防火帯作り、水源の森の保護、砂防ダム作りなどがあります。

タイは、各地域に、農場、農園、田んぼなど広大な農地があり、果物の試食、いちご狩り、田植え、茶畑での茶摘み、コーヒー農園でのコーヒーの実の収穫、野菜やハーブを育て、収穫し、郷土料理を作るなど、農村観光や農家ホームステイを含む農業体験を目的とした観光(AGRO-TOURISM) に適しています。

3. タイ文化に関する観光は、世界の文化的な観光の中でも注目すべき目的地です。なぜなら、ユネスコの世界遺産にも登録されている先史時代、歴史時代の文化や歴史があるからです。各地域や少数民族の多種多様な文化、とりわけ、タイ料理の文化は、その独特の味わいの魅力で名高く、世界的に人気があります。また、灯篭流しのローイクラトン、タイ正月ソンクラーン、菜食祭りのギンジェーなどの行事の観光もあります。そして、世界中から多くの旅行者を引き寄せるのが、バンコク観光で、世界で最も旅行者が集まる都市と言われています。それは、世界的な商業センター、グルメ、娯楽、美術博物館、アートギャラリーや遊園地などのレクリエーション施設が揃っているからです。

参考文献目録

外務省（1987）「日本とタイ」バンコク外務省発行　在タイ日本大使館
（1987）日タイ修好 120 周年 www.th.emb-japan.go.jp/th/relation/index100.htm/日タイ修好 120 周年　参照

タイの観光　バンコク都（2559），王の足跡をたどる 70 の道筋，
グル・サヌック（2556）ボーリング条約締結 http://guru.sanook.com/26061/ボーリング条約締結　参照

過去から現在のタイ・日本関係 (2553) thai-japanese-relations.blogspot.com/過去から現在のタイ・日本関係日　参照

チャントット・ワンナタノーム　観光産業ウィラット・エデュケーション株式会社，2552

デビッド・ワイアット，　タイ史，　社会学・人文学教本プロジェクト財団，2556

カシコン銀行 タイ・中国関係 時系列タイ・中関係 www.kasikornbank.com/chinatrade/thaiandchinalinks/時系列タイ・中関係　参照

カシコン銀行 タイ・中国関係 タイ・中関係の歴史概要 www.kasikornbank.com/.../A_ThailandChinaRelationshipTH/タイ・中国関係の歴史概要参照

ネーションブログ(2553)　タイ・イギリス関係 http://oknation.nationtv.tv/blog/Itsaratipratai/2010/09/04/entry-1/タイ・イギリス関係参照

プラーニー・ウォンテート　12 カ月間の行事：バンコクの人々が生き延びるための歴史・社会・文化：マティチョン，2548

プラバートソムデット・プラジュンラジョームグラオジャオユーフア　ラーマ 5 世他国との関わり　http://kingrama5.exteen.com/20140910/entry-4/ラーマ 5 世他国との関わり

プラウォラウォントゥー・プラオンジャオ・ジュンラジャククラポン(　2558)　ジャオチーウィット(Lords of Life)，River Books，2558

ワシン・パンヤーウットラクーン，　「マユリー・ンガオシーワット：国際社会におけるラオスらしさ」インドシナ・ジャンクション：東南アジア・レビュー，　4 年目第 7 部（2558 年 7 月から 12 月）：458-473

ワシン・パンヤーウットラクーン，　中北部概観（がいかん）：メコン-サルウィン文明の流れ　（ピサヌローク：メコン-サルウィン川文明研究所，　2556）

ワッタナ・クンウォン(2553)　在モスクワ・タイ王国大使館　タイ・ロシア関係の歴史　http://tht.haiembassymoscow.com/info/タイ・ロシア関係の歴史　参照

シリペン・ウォラパッス(2553)　古い文献に基づく第二次世界大戦前のアユタヤー-ラッタナコーシン時代のタイ・日本関係の研究　สืบค้นจาก www.thapra.lib.su.ac.th/objects/thesis/fulltext/thapra/.../fulltext.pdf/古い文献に基づく第二次世界大戦前のアユタヤー-ラッタナコーシン時代のタイ・日本関係の研究　参照

芸術局.　タイ文化の種々相(Various aspects of Thai social life and customs)　1,2 巻.　クルンテープ.　2547.

在中国タイ企業のための情報センター(2556)　在北京タイ王国大使館 www.thaibizchina.com/thaibizchina/th/thai-china/在中国タイ企業のための情報センター　参照

在ロシア・タイ企業のための情報センター http://www.thaibizrussia.com/ru/about/relations.php/タイ・ロシア関係　参照

英国大使館(2015)　タイ-イギリス関係 5 世紀目へ https://www.gov.uk/government/world-location-news/forward-into-the-5th-century-of-thailand-uk-relations. th/ タイ-イギリス関係 5 世紀目へ　参照

在ソウル・タイ王国大使館(2556)　タイと大韓民国の関係 http://www.thaiembassy.org/seoul/th/relation/31117-Bilateral-relations.html/タイと大韓民国の関係　参照

在北京タイ王国大使館(2556)　タイ-中国関係 www.thaiembbeij.org/thaiembbeij/th/republic.../thai-relations-china/タイ-中国関係　参照

在ロンドン・タイ王国大使館(2556)　タイ-英国両国関係情報 http://www.thaiembassyuk.org.uk/?q=node/137/タイ-英国両国関係情報　参照

サンティ・レックスクム(2558) . ラッタナコーシン芸術, 王宮出版 (2558)

サンティ・レックスクム.　リーラー・タイ.　クルンテープ：マティチョン, 2546.

ロシア連邦名誉領事館(2550) タイ・ロシア関係
http://www.rusconsulphuket.org/th/index.php/ history/thai-russia/タイ・ロシア関係
大使館付海軍武官事務所（2012） タイ・ロシア関係
http://www.rtnmoscow.com/index.php? option=com_content&view/タイ・ロシア関係 仏歴 2560 年 1 月 4 日参照,
http://70waysofking.tourismthailand.org/book/70waysofking.pdf
スリヤウット・スックサワット. シードヴァーラヴァティーからシーラッタナコーシンまで. クルンテープ：ムアンボーラン, 2537.
スパットラディット・ディサクン. タイの芸術. 第 9 版. クルンテープ：2534.
アネーク・ナーウィックムーン. タイの伝統文化. クルンテープ：セーンダーオ, 2547.

タイ王国観光・スポーツ省観光局 作成

〒10330 バンコク パトゥムワン区 ワンマイ地区 ラーマ 1 世通り 国立競技場
お問い合わせ先：電話 0-2219-4010-17　ファックス 0-2216-6906